

県立甲西高校建設に伴う
井戸遺跡発掘調査報告書

1983年

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

県立甲西高校建設に伴う
井戸遺跡発掘調査報告書

1983年

滋賀県教育委員会
財團法人滋賀県文化財保護協会

001.2
SK-27

序

甲西町は甲西駅開発等はみられる様に滋賀県下でも人口急増地域のひとつで甲賀郡地域開発のひとつの拠点とも言うべき地域になっています。

県教育委員会ではこの地域における生徒数の増加に対応して県立高校の新設計画が樹てられました。このため当課ではこの新設計画を受せて昭和57年度より敷地内の遺跡の実態を正確に把握するために発掘調査を実施してきました。その結果、こと遺跡の広がりと規模は予想を上まわるものであり、ここにその成果を本報告書にとりまとめることになりました。

本書が甲西町の歴史を知る上で一つの資料となれば幸い드립니다。

なお最後に調査にあたり御協力を賜った関係者の方々に深く感謝の意を表します。

昭和59年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化財保護課長

外 池 忠 雄

例　　言

1. 本書は、甲賀郡甲西町針新田に所在する県立甲西高校建設工事に伴う遺跡についての発掘調査報告書である。
2. 本調査は滋賀県教育委員会の依頼にもとづき、滋賀県教育委員会が、財団法人滋賀県文化財保護協会の協力を得て実施した。
3. 現地調査には、滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課技師木戸雅寿が担当し、一部財団法人滋賀県文化財保護協会技師清水尚氏の協力を得た。
4. 現地調査・整理については、大橋信弥氏（文化財保護課技師）の協力を得たほか川村俊彦氏（現一乗谷朝倉氏遺跡調査員）氏丸隆弘氏（現滋賀県文化財保護協会）、上田永人、岩木芳幸、小原慎一、西尾幹弘、斎藤博史、福井真理子（追手門大学）、狭川真一、高田秀樹（奈良大学）、伝吉正、中井徹、西村洋一、西村研一、樋上清孝、井上誠、円藤洋、大西薫、奥村一彦、落盛実、川端満、北野貞裕、中野禎、中野敏彦、西村久史、山元幸彦、北岡学、北島昭宏、小林義幸、福島明美、森本ゆかりの諸君が参加した。
5. 整理、報告書作成は、滋賀県教育委員会文化財保護課木戸雅寿が行ない、財団法人滋賀県文化財保護協会清水尚氏の協力を得た。
6. 遺物写真は、芳福滋が行なった。

目 次

I 位置と環境.....	1
II 調査の経過.....	1
III 自転車置場.....	4
1. 調査内容	
2. 造構	
3. 造物	
IV 運動場.....	5
1. 調査内容	
2. 造構	
V 擁壁.....	7
1. 調査概要	
2. 造構	
VI 造物.....	14
VII 体育館建設予定地.....	15
1. 調査概要	
2. 層位	
3. 造構	
4. 造物	
5. 小結	
VIII 結び.....	29

挿図目次

第1図 道跡位置図	3
第2図 S D—3 出土遺物実測図	9
第3図 S H—1 遺構図	11
第4図 S H—1 遺物出土状況	12
第5図 S H—1 出土遺物実測図	12
第6図 S H—2 出土遺物実測図	13
第7図 S H—2 遺構図	13
第8図 体育館建設予定地東西方向北壁断面図	16
第9図 体育館建設予定地南北方向東西断面図	17
第10図 体育館建設予定地南北方向東西断面図	18
第11図 第1遺構面ピット群平面図	21

図版目次

- 図版 1. ドレンチ配置図
- 図版 2. 自転車置場調査区遺構図
- 図版 3. 運動常調査区遺構図
- 図版 4. 摺壁遺構図 1
- 図版 5. 摺壁遺構図 2
- 図版 6. 摺壁遺構図 3
- 図版 7. 摺壁遺構図 4
- 図版 8. 摺壁遺構図 5

- 図版9. 摺壁遺構図6
- 図版10. 摺壁遺構図7
- 図版11. 摺壁遺構図8
- 図版12. 摺壁遺構図9
- 図版13. 摺壁遺構図10
- 図版14. 摺壁遺構図11
- 図版15. 摺壁層位図2
- 図版16. 摺壁層位図
- 図版17. 遺物実測図
- 図版18. 遺物実測図
- 図版19. 遺物実測図
- 図版20. 遺物実測図
- 図版21. 遺物実測図
- 図版22. 遺物実測図
- 図版23. 第2遺構面平面図
- 図版24. (上)自転車置場5トレス、6トレス遺構検出状況
(下)自転車置場6トレス遺構検出状況
- 図版25. (上)自転車置場7トレス遺構検出状況
(下)自転車置場7トレス遺構検出状況
- 図版26. (上)運動場2トレス遺構検出状況
(下)運動場3トレス遺構検出状況
- 図版27. (上)摺壁西部全景
(下)摺壁南中央部全景
- 図版28. (上)摺壁SK-7全景
(下)摺壁SK-11全景
- 図版29. (上)SH-1全景

(下) S H-2 全景

図版30. (上)擁壁 S K-2 3 全景

(下)擁壁 S D-1 7 全景

図版31. (上)第1遺構面ピット群(東より)

(下) S K-1 遺物出土状況

図版32. (上) S X-1 遺物出土状況

(下)第2遺構面全景(南より)

図版33. (上) S B-1 および粘土面上遺構群(北より)

(下) S B-1(南より)

図版34. (上)第2遺構面東半面全景(北より)

(下) S K-2 および S K-3 周辺(西より)

図版35. (上) S D-3 および S D-4(西より)

(下) S D-4 遺物出土状況

図版36. (上)第2遺構面全景(北より)

(下) S B-2(南より)

図版37. 遺物写真

図版38. 遺物写真

図版39. 遺物写真

図版40. 遺物写真

図版41. 遺物写真

図版42. 遺物写真

図版43. 遺物写真

図版44. 遺物写真

図版45. 遺物写真

I 位置と環境

井戸遺跡は滋賀県甲賀郡甲西町針新田に所在する。

当地は、鈴鹿山地にその源を発し琵琶湖に向かい西流する野洲川の左岸、野洲川氾濫堆積土壌上に立地する。現在は全域水田として開墾されているが、字の新田より考えて、もとは荒地か河岸であった所を新たに開墾した土地であると思われ、從来より遺跡の存在は確認されていなかった。

周辺遺跡をみてみると、野洲川右岸丘陵沿いには大谷遺跡・塚山遺跡・正福寺（古墳）・正福寺遺跡・花園寺遺跡（寺院跡）等があり、左岸側丘陵沿いには光明寺遺跡・了安寺遺跡・片山遺跡・閑昭寺遺跡・狐塚遺跡・針遺跡・茶臼山遺跡（古墳）・尊光寺遺跡・八島寺遺跡・円福寺遺跡・養林寺遺跡（寺院跡）の遺跡群が周知されているが、これらの古墳・古寺・寺院跡を語る集落跡は未周知であり、当然のごとく野洲川河川敷に広がる沖積平野上にその存在が考えられるところであった。

II 調査の経過

甲西町は、滋賀県下でも人口急増地域の一つであり、甲西駅開設等に見られる様に甲賀郡地域開発の一つの拠点とも言うべき地域になっている。この結果甲西町では生徒数の増加をみ、これ等の事態に対応する為県教育委員会ではかねてより県立高校の新設を計画していたが、昭和58年度事業として実施する運びとなった。この甲西高校新設計画のあった甲西町針新田周辺は遺跡台帳にも記載されていなかった未周知の遺跡であり、この事から、まず現地踏査を行なった結果、遺跡の存在する可能性がでてきたので事前に発掘調査を行なうべく文化財保護法に基づき、滋賀県知事より文化庁長官あて「埋蔵文化財発掘通知」の提出があった。この通知と依頼を受けて、県教育委員会では小字名の井戸をとり井戸遺跡とし発掘調査を計画した。

発掘調査は、その性格から構造物建設予定部分は全面調査する事を基本に計画した。まず工事は遺跡に該当しない校舎以外では、体育館部分が先行したため体育館建設予

定地内全面にトレンチを設定し、7月14日から実施し10月30日に調査を終えた。調査の結果、重要遺構が認められたので設計変更の協議を行ない、体育館の支柱が遺構をつらぬかない位置への移動を協力を得て実施し、真砂を充填し遺構の地下保存を行なった。

11月4日からは調査を擁壁部分に対して実施し、同じく擁壁および水路部10m×300mを全面調査を実施し完全発掘を行なった。また、1月5日からは、直接構造物は建設されないが厚い造成土で覆われる運動場部分に対して遺跡の範囲と状況を把握する為に、幅5mでトレンチを4本設定し遺構の確認だけをして埋め戻した。同じようく2月にはいり、自転車置場に対し、幅5mで3本のトレンチを設定し遺構の確認調査をして埋め戻した。

調査は2月10日すべて完了した。



1. 井戸遺跡 2. 塚山遺跡 3. 正福寺遺跡 4. 岩瀬谷遺跡 5. 大谷遺跡
 6. 花園寺遺跡 7. 正法寺遺跡 8. 養林寺遺跡 9. 月福寺遺跡 10. 八島寺遺跡
 11. 丸岡城遺跡 12. 茶臼山遺跡 13. 開照寺遺跡 14. 尊光寺遺跡 15. 針氏城遺跡
 16. 片山遺跡 17. 針遺跡 18. 了安寺遺跡 19. 狐塚遺跡 20. 光明寺遺跡

第1図 遺跡位置図

III 自転車置場

1. 調査内容

敷地内、南東に予定された自転車置場は、造成盛土表面上にコンクリートを流し込んだ簡単な構造物が上部に構築されるだけであったので今回の調査は、調査対象面積1800m²に対し、5m×35mのトレンチを3本設定し、遺構を掘りこまず、遺構を確認するために試掘調査を行なった。

調査は発掘用重機によって荒掘を行ない、その後手作業によって精査を行ない、平面図と写真によってその成果を記録保存した。

層序は第1層が整地の為の盛り土で、第2層は旧田面であり耕土であった。この耕作土の直下に若干の床土があり、その下部に野洲川の氾濫によって堆積したと思われる。砂層と疊層が混在した面が検出された。この面が遺構検出面であった。

2. 遺構

遺構は、全て野洲川氾濫による疊層土に切り込んでおり遺構部分には茶褐色土が埋まっている。個々の遺構をみてみると、6トレンチ～8トレンチを斜めに横切る様な溝(SD-1)があり、7トレンチ・8トレンチではそれよりも東側に直径20cm～80cmの大小の柱穴群が検出された。特に7トレンチの中央部と、8トレンチの東隅に大きな柱穴が並び、後章でみられるような倉庫跡となる可能性が非常に高い。

3. 遺物

遺物は遺構面上で、須恵器破片が大量に出土しているが、個体を成すものは極くわずかであった。

IV 運動場

1. 調査内容

学校敷地の東半部分に造成される運動場部分に於いては、運動場自身何ら構造物をともなはず、現高面より1m以上の盛土とグランド用土によって造成されるだけで半永久的に遺構自身がその盛土によって保存されていくものであった為、未周知であった井戸遺跡の遺跡の種類と範囲、現状を今後の資料としておくために、直接遺構を破壊せずに、遺跡、遺構の確認調査を実施した。

調査は、運動場敷地の南北を貫らぬくように東西幅5mで均等な間隔をおいて、トレンチを4本設定し、東より順次1トレンチ、2トレンチと名付け、発掘用重機によって遺構面までの土砂を除去し、遺構面を検出したのち平板によって実測をおこない、検出状況の写真を撮影したのち、遺物を拾い上げ、層位を確認し埋め戻しを行なった。

2. 遺構

第1トレンチ

第1トレンチでは、中央部分で土壌が3基、柱穴が8個検出された。いずれも暗黄色粘土の上に暗茶褐色土が切り込んでいる。

第2トレンチ

第2トレンチでは、P—7区で円形の土壌と溝状遺構が、それより北で一段下がっていたQ—4区で何条かに切りあった溝が東西方向で検出されている。

第3トレンチ

第3トレンチでは、一番南端で大土壌とその周りに柱穴が若干検出された。さらにそこから北で、第2トレンチのQ—4区で検出された溝がO—5区に伸びてきている。その溝より北側では遺構面が疊層になり、その上面で柱穴が数個確認されている。

第4トレンチ

第4トレンチでは、第2、第3トレンチの中央を東西に横切るように伸びてきている溝が、K—4区で検出された。その両側の部分では2、3の柱穴が確認された

だけであった。

第1トレンチ～第4トレンチで検出された遺構をみてみると、おもに溝と柱穴がその中心を占めている。トレンチ掘りということもあって遺構の総体的な面は即断できないが、体育館部分より較べて遺構の密度は低いといえる。しかしながらその遺構の広がりは、確実に高校建設予定地のはば全域に広がっていることが確認でき、第一遺構面上で調査は終えたが、遺構面上で採集した遺物の量は破片ばかりではあるが少ない量とはいはず、検出面以下で第二遺構面の存在する可能性もあり、遺跡の一部分を占有する地域であるといえるであろう。

V 擁 壁

1. 調査概要

学校建設予定敷地内の外周、特に正門より南の西側、南側、東側に計画されている擁壁と水路に伴なう発掘調査は、工事自体が貫入工法をとり遺構自身が破壊される深度であるために、調査対象地域 $10m \times 350m = 3,500m^2$ に対し全面に調査区を設け全面発掘を実施した。

調査は、発掘用重機によって遺構面直上まで耕土を除去した後、遺構面の精査を行ない遺構を完掘し、実測図と写真によって記録保存を行なったのち埋め戻して調査を終了した。

2. 遺構

調査によって検出した遺構は柱穴（S P）が102、溝（S D）が19、土壙（S K）が26、堅穴式住居跡（S H）が2であった。また、調査区が狭く細長い為柱穴群がどのような掘立柱群を構成するかは現時点では解明できなかったが、古代中期の時期を中心とする溝、土壙を含む遺構群が検出できた。さらに一部の地域で布留式土器を含む堅穴住居跡2棟と若干の遺構群が検出された。

以下に個々の遺構について若干の説明を加えておく。

柱 穴

P-1、埋土は茶灰色土。礫層上に切る。深さは約30cmを測る。

P-2、埋土は茶灰色砂礫土。礫層上に切る。深さは約15cmで梢円形を呈する。

P-3・4、埋土は茶灰色泥礫土。礫層上に切る。深さは約25cmを測る。

P-5・6、埋土は茶灰色土。礫層上に切る。深さは約20cmを測る。

P-7・8・9、埋土は暗茶灰色混礫土。粘質土上に切る。深さは約15cmを測る。

P-10、埋土は暗灰褐色粘質土。深さは約10cm足らずの浅い長円のものである。

P-11~24、いずれも灰褐色粘砂土上に切り、削平を受けたごく浅いものばかりである。

P-25~27、この部分から柱穴を掘り込んでいる地山のレベルが上がっている。いずれも建物を示すようなまとまりがない。

P-28~101、これらの柱穴群は今迄の所よりも一段高い微高地上にあるが、低い部分で検出されているものとの関係の明瞭な解答はえられなかった。埋土は全て暗褐粘質土のもので柱穴自体は10cm前後と浅い。他の深い遺構から考えて、微高地上に竪穴式住居跡が作られた以後、掘り込まれたか同時期に掘り込まれたものが削平を受けたものと考えられる。

土 壤

SK-1、SD-3の肩の一部を切る様に存在。直径2m、深さ約40cmを測る。埋土は人頭大の礫でぎっしりと人為的に埋められた形跡があった。遺物は時代比定がむづかしいが、少量の土師・須恵器の破片が出土している。

SK-2、トレンチより南にL字形に伸びる土壤で深さは20cm前後と浅い。埋土は茶褐色混疊土であった。遺物は土師器が七点、須恵器杯身片(TK209か)が一点出土している。

SK-3~5、いずれも平面上不整な形状を成す。深さは30cm前後ある。埋土はいずれも茶灰色混疊土であった。遺物は無かった。

SK-6、浅い土壤状の落ち込みである。

SK-7、三角形を程する土壤で中央部で段掘りになっている。堆上は全部で5層であった。遺物は出土していないが、土取り穴の様な人為的なものであると思われる。

SK-8・9、浅いSK-9を切り、深さ50cmのSK-8を作っている。SK-8の埋土は茶褐色混疊土である。遺物は出土していない。

SK-10、瓢箪形を程し、深さ20cmの土壤で埋土は暗茶灰色粘質土であった。

SK-11・12、深さ10cmで長細いSK-12(暗茶褐色土)を切り込むように同じ方向で深さ40cmほどのSK-13がある。埋土は第1層が暗灰褐色粘質土(マンガンを大量に含む)、第2層が暗黄灰褐色粘質土でいずれも平行堆積であった。遺物は出土していない。

SK-13、P-65・66によって切られた土壤で一部段掘りになっている。埋土は

第1層が暗茶褐色粘質土、第2層が暗黄灰褐色粘質土、第3層が暗茶灰褐色粘質土で肩口より落ち込んだ堆積をなしている。

S K-17、幅2m、長さ13mの大きな土壤で深さは30cm~40cm前後である。形状、層位、埋り方ともにS K-11と酷似している。

S K-21・22、細長い溝状土壤である。両方ともに同じ形状、同じ方向をしており両方で一対をなすものであると思われるが性格は不明である。

S K-23、トレンチ東端に半部がひっかかった状態で検出、3段の段掘りになっている。また1段目の縁部分に柱穴が3個検出された。遺物は平安時代前半のものが中心に出土している。

溝

S D-1~4、調査区Z-7~C-7にかけて、東西方向に伸びる溝が4条検出されている。いずれも同一方向、場所に掘り込まれ、切り合い関係にある。

造構の切合関係からいくとS D-4が一番古く、それをS D-3が切り、それをS D-2が切り、S D-2をS D-1が切る。

S D-6~8、S D-6はS D-1~4と同じような方向性を示している。「幅10cm深さは深いところで20cm弱である。またS D-7・8はS D-6の支流のようなものと思われる。



第2図 S D-3 出土遺物実測図

S D-11~15、トレンチに対して直行するように南北に軸をとる浅い溝である。埋土はS D-11が暗黄灰色粘質土、S D-12~15が暗灰色粘質土であった。

S D-17、微高地を降りきったところに東西に走る溝で、性格そのものは

5CM わからない。

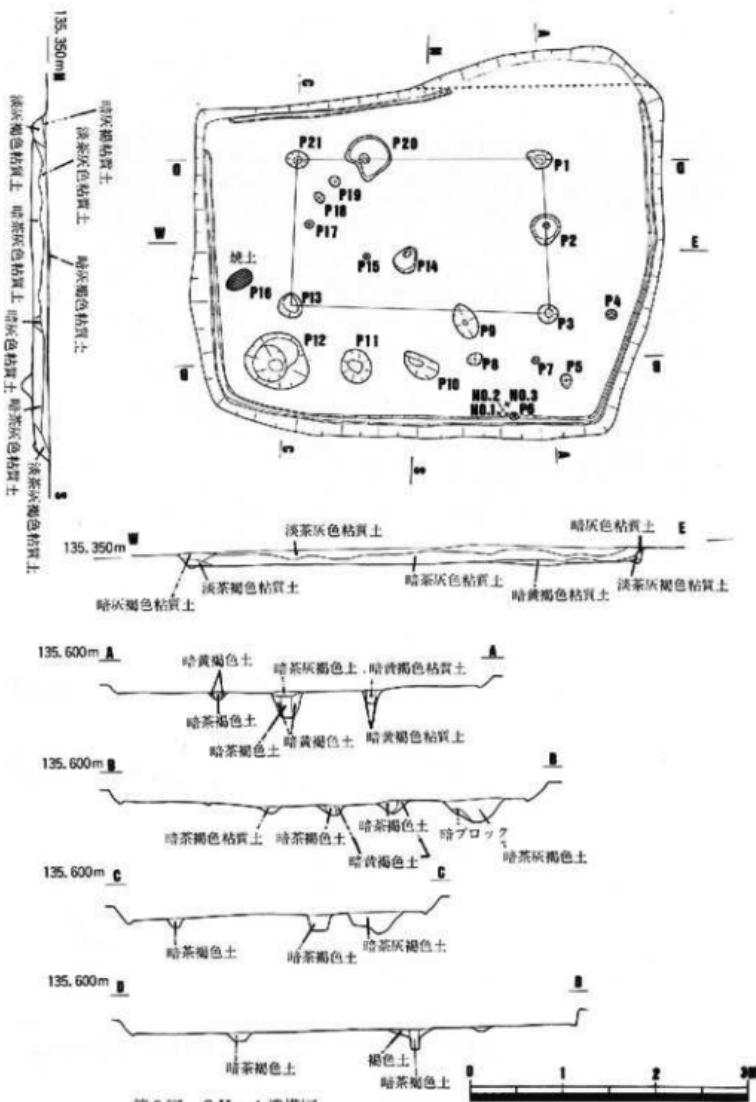
豎穴住居跡

S H - 1

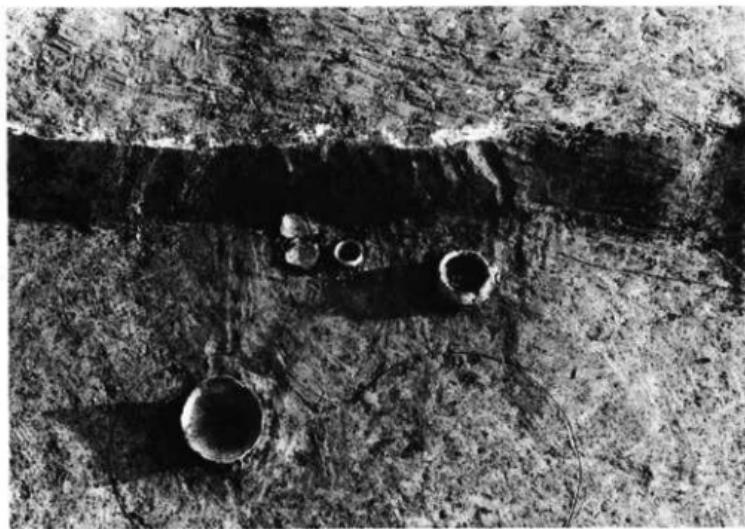
今回検出された2棟の豎穴住居跡うち、ほぼ全体が完形に近いものである。形態は長方形プランを程し、長辺4.5m、短辺3mで北端の壁が一部肩くずれを起こしている。その構造は、幅10m程度の浅い壁溝が一部切れて無い部分があるが、ほぼ全体にめぐっており、床面上では柱穴が21個確認できた。うち柱は憶らく4本柱（S P - 1, P - 2, P - 3, P - 13, P - 21）であろうと思われ柱間はほぼ2.9m × 1.6mであった。その他の内部施設をみてみると、東端壁溝側に径30cmほどの炭、焼土を含む炉穴が確認されており、南東端には深さ30cm、径50cmほどの貯蔵穴らしきものが確認された。またその他のピット群は、構造物を支えるための添え柱的役割わりをはたしたと思われる柱穴であろう。

出土遺物は、埋土中より出土したものは全て小破片のものばかりで、実測可能なものは極少量であった（第5図 S H - 1 出土遺物実測図、5・6・7・8・9参照）。さらにこの住居跡で特に注意をひくものは床面についたまま発見された3点の完形土器（第5図 S H - 1 出土遺物実測図、2・3・4）である。3点ともに床面に直立させた、建物が廃絶された時の完全な姿のままで検出されている。S H - 1 遺構図の住居跡南側壁溝側、No.1の地点では小型の浅鉢（2）、全体に胎土は非常に粗く、頸部に斜め方向のカキ目を施しその下方に沈線を2条廻す。No.2の地点では手づくねのミニチュアの杯型土器が（4）、No.3の地点では底部一穴穿孔の瓶（3）が、3点セットで出土した。遺物はいずれも布留式土器であると思われる。これらの遺物が生活していた時のままを示すのか、家屋廃絶に対し神へ供獻する為に供えられたかは今後の疑問の残るところであろう。

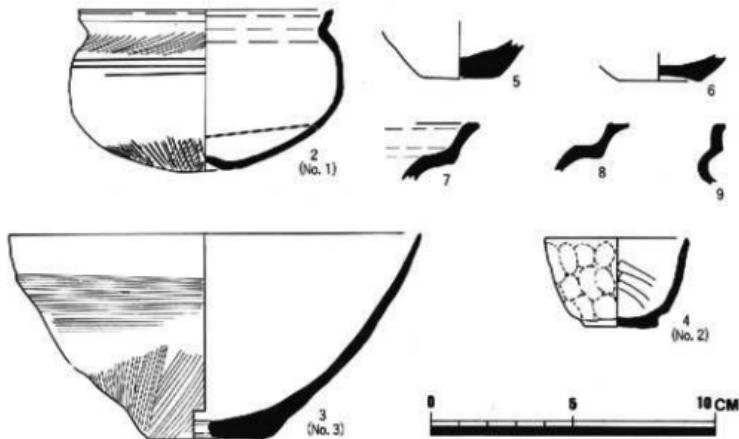
埋土は両肩口から落込んでいる土、淡茶灰褐色粘質土が若干あるものの、大きくみてほぼ単純2層であると思われる。第1層は淡灰色粘質土で、第2層は暗茶灰色粘質土である。また、住居跡の深さは20cmと浅く、憶らく上部をかなり削平を受けていると考えられる。



第3図 SH-1 遺構図



第4図 SH-1 遺物出土状況



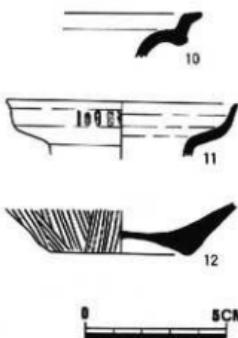
第5図 SH-1 出土遺物実測図

SH-2

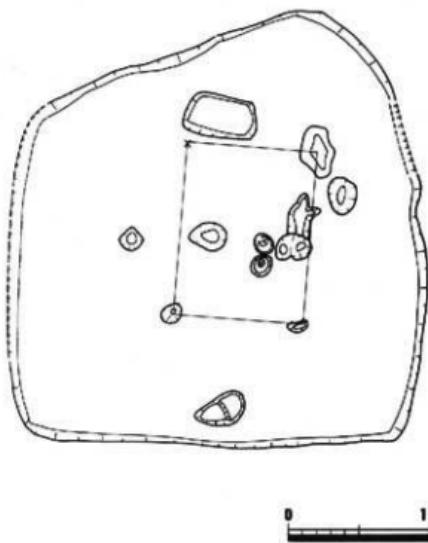
SH-1より南東に約30cm位のところに位置する。

形態はおそらく方形プランを構成するものであると思われるが、かなり上部からの新しい遺構によって切られており、全体の形状はいまひとつ不鮮明である。

カマドや炉等の内部施設は確認されなかったが、床面で憶らく4本柱であったろうと思われる柱穴が確認されている。出土遺物は、床面についたものではなく、出土した遺物のはば全てが埋土中より出土したものであり、小破片ばかりで実測可能なものは極わずかであった。(第6図 SH-2出土遺物実測図、10・11・12参照)時期は、先に述べたSH-1でも出土している土器群と同じ様に布留式の土器である。埋土もSH-1同様、暗茶灰色粘土で、深さも20cm前後と浅くかなりの削平を受けたものと考えられる。



第6図 SH-2出土遺物実測図



第7図 SH-2遺構図

VI 遺 物

自転車置場・運動場・擁壁調査区で出土した遺物は、全て合わせてもコンテナ10箱であった。

出土した遺物の種類をみてみると須恵器をはじめ土師器、灰釉陶器があり全て少片ばかりであるが、全体を占める比率は圧倒的に須恵器が高かった。

各々の器種をみてみると須恵器は杯身・杯蓋が主体で他に、高杯・壺などが多く壺・甕類は若干であった。灰釉陶器は壺・杯が若干出土している。これらの遺物の中から特に形状をなし形態のよくわかるものが多い須恵器をみてみると以下のようになる。

遺跡出土遺物中最も年代的に遡る遺物は、S-5・S-6によって代表されるもので6世紀前半に推定できる。SD-4より出土している。その年代の次にくるものは6世紀中頃の遺物でS-1(SD-3)・S-7・S-8・S-9・S-10・S-19等があり、その量は前段階のものより多いが遺構中よりはあまりその出土はみていない。さらに6世紀末頃のものには、S-2・S-3・S-4・S-11(SD-2)・S-22等があり、それ以後7世紀初頭に統くものとして、S-12(SK-1)・S-13、7世紀後半(660)のS-17、8世紀前半のS-15、8世紀後半のS-16・S-18・S-20があり年代的に切れ目なく出土しているがその出土量は少なくなつておらず、それ以後破片ではあるが11世紀代までの遺物が認められている。

以上のことからSD-1は6世紀末より新しいもので、SD-2は6世紀末頃まで存続し、SD-3は6世紀中頃、SD-4は6世紀前半と継続して存在していたことが分かる。遺跡自体は遺物の年代とその量より、6世紀前半頃には成立をみ、7世紀代より盛行し8世紀末まではそれが継続し、11世紀代までは衰退していったものと思われる。

VII 体育館

1. 調査区の概要

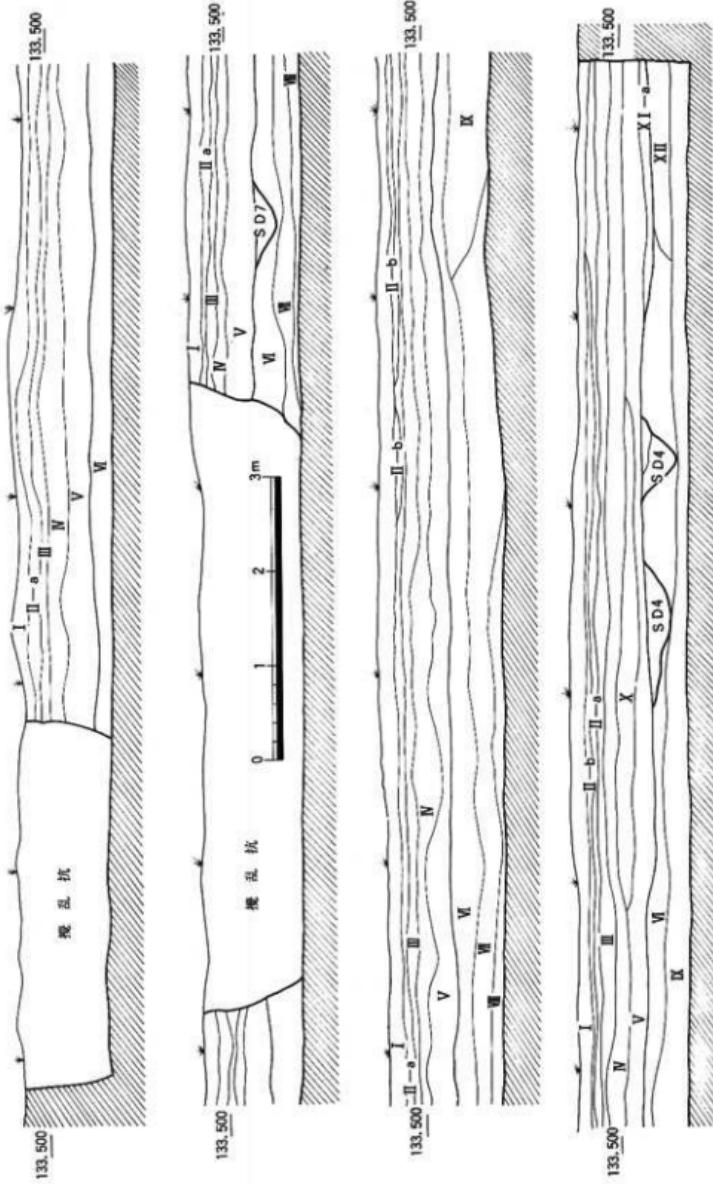
本調査区は、F—2区より、南側へF—6区まで（一部E—6区を含む）、東側へJ—2区までのほぼ長方形をなす範囲、約2500m²を調査対象とした。調査期間は、擁壁部調査に続き、7月20日より開始したが、実質的調査は8月11日から10月30日までの約3ヶ月を要して実施した。調査区のはば全域に野洲川の氾濫による礫の堆積が観察され、バックフォーを使用しても掘り下げには通常以上の時間を要した。また調査区の各所に土砂削取等のために掘り込まれた擾乱坑が見られ、調査の進行の障害となつた。

2. 層位

本調査区において平均的に観察されている層位は、第Ⅰ層・耕土、第Ⅱ層・淡灰褐色土、第Ⅲ層・茶褐色弱粘質土層、第Ⅳ層・淡灰褐色土（比較的縮まる）、第Ⅴ層・茶褐色土（少量の礫を混入する）、第Ⅵ層・茶褐色混疊土（疊粒は小さい）、第Ⅶ層・灰褐色混疊土、第Ⅷ層・黄灰色疊層である。

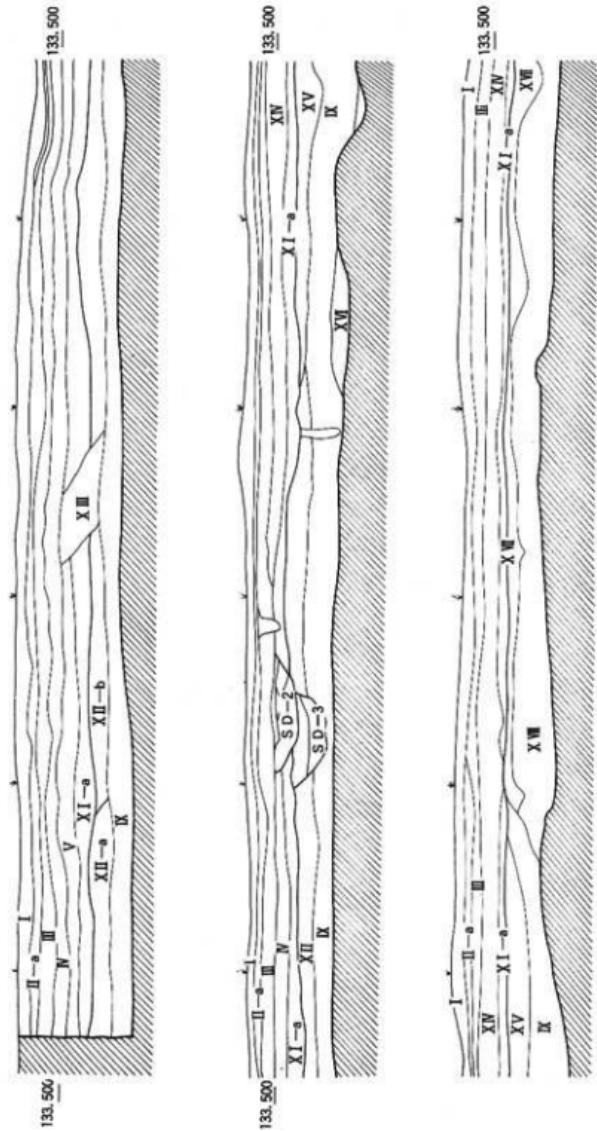
第Ⅰ層～第Ⅲ層は、ほぼ調査区全域に水平堆積し、第Ⅲ層内には少量であるが遺物が含まれている。第Ⅰ遺構面は第Ⅳ層上面に検出される。第Ⅳ層及び第Ⅴ層は多くの遺物を包含する、所謂包含層で、その直下第Ⅶ層上面に第2遺構面が立地している。第Ⅷ層は疊層で、遺構、遺物共に検出されない。

第2遺構面は、本来の生活面と考えられる粘質土面と氾濫によって形成された覆疊土面に大別される。前者はJ—2区よりF—6区にかけて、調査区のはば対角線上に約10～15mの幅で帶状に存在する。SB1・SK2～4等の遺構群はこの粘質土面上に立地する。SD10以東は強粘質土面で遺構は検出されなかった。後者はほぼSD4を境界として、その北側に集中している。両者間には遺物観察の限りにおいて大きな時間差は認められず、本来の生活面に堆積した疊面上に、短期間に遺構の再構成がなされたものと推察される。

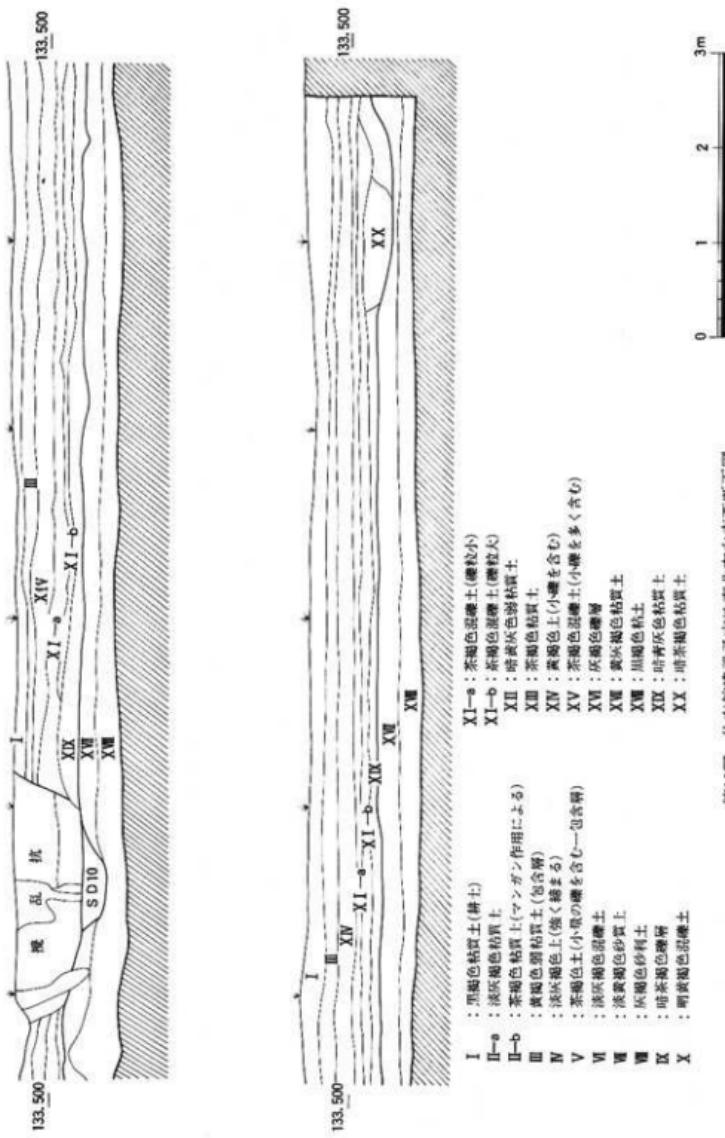


第8図 体育館建設予定地東西方向北壁断面図

0 1 2 3m



第9圖 体育场建筑预定地南北向東西断面图



第10図 体育館建設予定地南北向東西面断面図

3. 遺構

a. 第1遺構面

調査区域の北西部（F～G－2～3区）のピット群を主体として、溝2条、土壙1基、土器溜り状遺構等が検出された。

S D 1 F－3区に位置し、ピット群の西端を北流する南北溝。北側は擾乱坑に失われ、残り約7mを検出した。深さは約10cmを測る。

S D 2 J－3区よりE－5区に向って西流する東西溝。深さ約30cmを測り、黄灰褐色砂質土を埋土とする。S D 3の上層に位置する。

S K 1 H－4区に位置する。暗茶褐色土を埋土とし、径50cm、深さ約30cmのはば円形をなす。埋土中に多量の土師質土器を含む。

S X 1 I－5区に位置する土器溜り状遺構である。ミニチュアを含めた高杯類が計10個体分一括して出土した。掘り方が明瞭に把握されず、土壙状になるものか、生活面上に置かれたものがそのままの状態で土に覆われたものか判然としない。

b. 第2遺構面

S D 10以東を除く、調査区全域より、建物2棟、溝9条、土壙4基等が検出された。また野洲川と推測される氾濫原の流路が比較的明瞭に観察される。遺構の立地形態は、礫原上に立地するものと氾濫に没食されない粘質土面に立地するものの2つに大別される。

S B 1 I－2～3区の粘質土面上に位置する3×2間の総柱建物である。棟方向はN-10°-Eを示す。掘り方は一辺約60cm～80cmのはば偶丸方形をなし、柱痕形は径約20cmの円形で、建てかえ、若しくは引き抜き等の痕跡が認められる。

S B 2 F～G－4区の礫原上に位置する3×3間の総柱建物である。棟方向はN-24°-Eを示す。掘り方は礫面上立地のため、一様をなさず、一辺約1.1mの偶丸方形のものや、径1mの円形を呈するもの等が見られる。柱痕形は径約40cmのはば円形をなす。暗灰褐色土を埋土とする。

S D 3 S D 2の下層に位置する。J－3区よりE－5区に向って西流する東西溝で、幅約80cm、深さ約35cmを測る。淡黄灰色粘質土を埋土とする。

S D 4 S D 3にはば並行し、E－5区よりI－2区に位置する東西溝で、I－2区において2方向に分流する。幅約70cm、深さ約35cmを測り、青灰色砂質土を埋土と

する。本調査において最も多量の遺物を出土した遺構である。

S D 5 F～G－4区に位置する東西溝で、幅約1m、深さ約40cmを測る。東端は攪乱坑に断たれ、以後消失する。S B 2と重複関係にあり、S B 2より古い時期のものとえられるが、大きな時期差はないと考えられる。

S D 6 E－3区よりI－2区に向って東流する東西溝で、幅約50cm、深さ約20cmを測る。茶褐色土を埋土とし、碟原に立地する。

S D 7 H－2区に位置する南北溝で、幅約60cm、深さ約20cmを測る。黄灰色土を埋土とする。S D 6と重複関係にあり、S D 6に切れ込んで、南端は消失している。

S D 8 F～G－2区に位置する東西溝で、西端は攪乱坑によって消失している。幅約80cm、深さ約25cmを測り、淡灰褐色土を埋土とする。埋土中には少量の焼土を混入する。

S D 9 I－5～H－4区に向って北流する南北溝で、北端はS D 3に注ぐ。3層の堆積があり、基本的に青灰色土（小礫を多く含む）を埋土とする。幅約1m、深さ約25cmを測り、南端は消失する。

S D 10 J－5区よりG－7区に向って西流する東西溝で、幅約1m、深さ約25cmを測る。黄灰褐色粘質土を埋土とする。

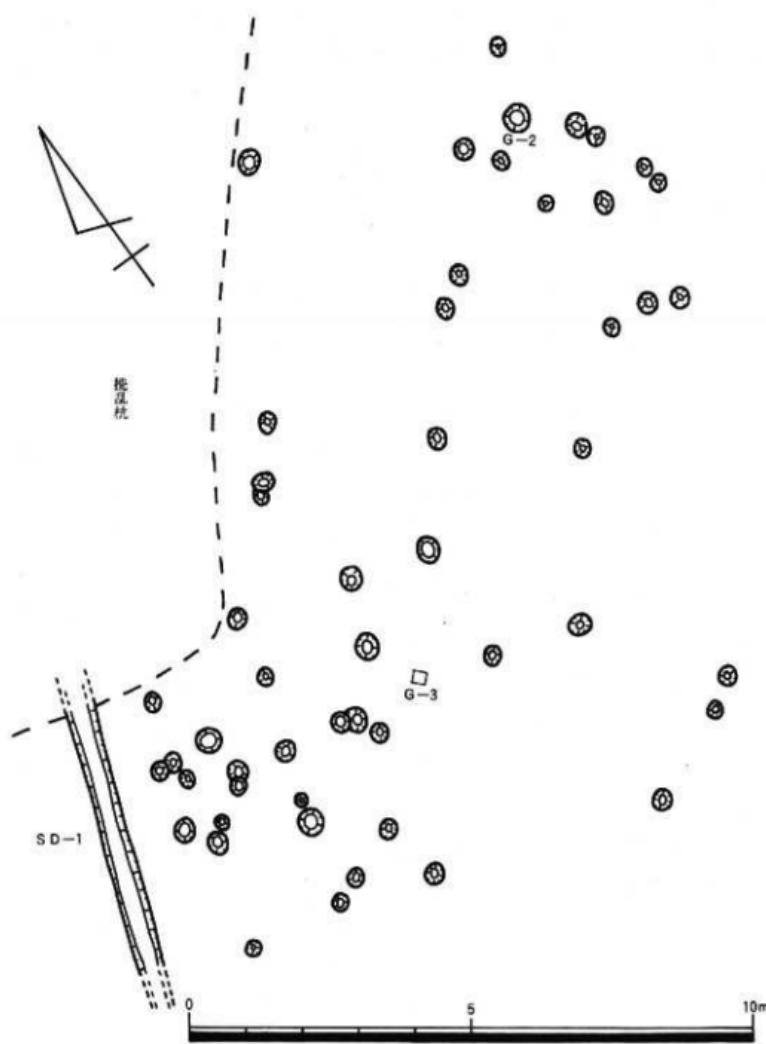
S D 11 G－6区に位置する東西溝で、幅約70cm、深さ約35cmを測る。約4mを検出した。西端は攪乱坑によって断たれ、以後消失している。

S K 2 I－4区に位置し、南北幅約50cm、東西幅約3.1mの長楕円形を呈する。深さ約10cmで、暗灰色粘質土を埋土とする。粘質土面上に立地する。

S K 3 H－4区の粘質土面に位置する。南北幅約2.2m、東西幅は、東端部で約70cm、西端部で約20cmを測る。深さは西端に最深部があり約30cm、最も浅い東端部では約10cmを測る。暗茶褐色土を埋土とする。

S K 4 S K 3の西側に位置し、S K 3との重複関係より、S K 3よりも下る時期のものと把握される。南北幅は約50cmを測り、深さは約15cmを測る。

S K 5 F－3区に位置する焼土坑で、径約1.2mの円形をなす。碟原立地するが、東側に約3.5m、西側に約3m、南側に約2.8m、北側に約50cmの長方形をなす範囲でS K 5の周間に広がる極めて表出する礫の少ない特異な土面に存在している。この特異な土面については、把握を試みたが判然とはし得なかった。当集落におけるS K 5



第11図 第1遺構面ピット群平面図

の機能が、その周囲の疊原に粘質土を覆うという作業を行なわせたものと考えられる。埋土より土師器、須恵器の小片が検出された。(清水)

4. 遺 物

当調査区における遺構及び包含層より、須恵器、土師器の他、綠釉陶器、灰釉陶器等多量の土器が出土した。

a、第1遺構面

S D 2 (1)は土師器の小皿で、口径約8.5cm、器高約1.5cmの法量を測る。底部外面は不調整である。

S K 1 土師質土器が一括して出土している。(2)～(8)は土師質の皿で、口径約14cmの大形の皿(7・8)と口径約9cm前後の小皿に大別される。(5)は器高約3.3cmを測る法量の大きな皿である。(8)は口縁部が受け口状に屈曲し、器高約1.1cmを測る法量の小さな薄い皿である。底部外面は不調整で凸凹が著しい。小皿は、いずれも体部が外反気味に伸び、端部をやや尖り気味に丸くおさめるタイプで、肉厚に成形されている。器高は約1.7cmを測り、比較的ていねいなナデ調整が施される。

S X 1 土器溜り状遺構である。ミニチュアを含めた高坏が一括して出土し、その周囲より土師器の甕、須恵器の坏身等が検出されている。

(9)は須恵器の坏身で、口径約9.5cm、器高約4cmを測る。体部は外反し、焼き歪みする。(10)は土師器の甕で、復元口径約16.5cmを測る。くの字状に外反した口縁部は先端に平坦面を形成し、内面に肥厚する。体部外面に粗いハケ調整を施すが、全体に摩耗し判然としない。

(11)～(20)は土師器の高坏である。

(11)～(13)は手捏ね成形によるミニチュアで、器高はいずれも約8cmを測る。(12)は口径約10.8cm、底径約6.4cmで、(11)・(13)に比して、ていねいに成形されている。

(14)～(20)は通有の高坏である。(20)を除くいずれも坏部を欠損するが、ほぼ(20)と同タイプのものであろう。摩耗が著しく、調整等は判然としないが、脚柱部内面には絞り痕が観察される。

b. 第2遺構面

S D 3 (44)は須恵器の短頸壺である。口径約6.5cm、器高約11cmを測る。口縁部は内凹し、最大径は胸部中央に位置する。

S D 4 当調査区において最も多量の土器を出土した。

(21)～(33)は須恵器の壺である。

壺蓋は4型式に分類される。

a. 口径約11cm前後、口縁端部よりかえりの先端が出るタイプ—(21)

b. 口径約9cm～12cm、かえりの先端が口縁端部より出ないタイプ—(22)・(23)

c. 口径約18cm前後、bタイプの口径が大きくなるタイプ—(24)

d. 口径15cm前後、かえりをもたず、先端を直立させるタイプ—(25)・(26)

a・b類は小さくシャープなつまみをもつが、d類には偏平なつまみが付く。a・
b類については陶邑TK116、TK217に、d類についてはTK116等に類品が認められる。天井部のヘラケズリはb類にていねいに施されている。

壺身は2型式に分類される。

a. 蓋うけのたちあがりをもたず、平底を呈するタイプで、a・b類の壺蓋に対応するものである。—(27)

c. a類に高台の付くタイプ—(28)～(31)

c類の壺身には、口径11cm前後のもの—(28)と15cm前後のもの—(29)～(30)がある。概して小型法量のタイプにナデ調整のていねいなものが多い。いずれも高台は斜向外方へ踏まる型式のものである。

(32)～(34)は陶邑TK217等に見られる。高台が極めて高い壺身の底部と考えられる。しかし、高台径が小さく、別器種の可能性を考慮しなければならない。

(35)・(36)は土師器の甕である。口縁部はくの字に外反し、全体に肉薄である。いずれも摩耗が激しく、調整等は判然としないが、(36)の外面体部にハケ目痕が観察される。

(37)～(43)は須恵器の甕、壺類である。

(39)は奈良研分類の甕Bで、口縁部外面に2条の凹線が廻り、体部外面には細い格子状叩き目、体部内面には青海波文の叩き目が観察される。(40)は口縁端部に突帯状の肥厚部が付き、口縁部外面には3条及び2条の凹線が廻る。肥厚部及び2本の凹線

間には極めて密な波状文が配される。(41)は(39)とほぼ同様の壺であるが、やや器肉が薄くなっている。(42)は壺の可能性が高い。口縁端部は直立する。(38)は壺と考えられる底部である。貼付高台で、極めて肉厚に形成されている。全体に粗雑な調整である。

S D 5 (45)は須恵器の壺蓋と考えられる。口径約10.5cmを測り、強い輪轂ナデによって成形される。蓋受けのたちあがりをもつ壺身の最も法量の小さくなるタイプに対応するもので、後述の f 類に比定される。

S D 6 (46)は土師器の壺である。断面丸味を帯びた貼付高台をもつ。輪轂ナデによって、ていねいに成形されている。

S D 7 (47)は須恵器の壺である。頸部は短く、口縁端部は丸く肥厚させる。

S D 10 (48)は須恵器の壺で、復元口径約37cmを測る大型のものである。ラッパ状に開く口縁部は、端部に平坦面を形成し、内面に僅かな突出部をもっておさめる。全体にナデ調整されており、叩き目等は観察されない。(49)は蓋受けのたちあがりをもつ須恵器の壺身である。口径約13cmを測り、後述の e 類に含まれる。

S D 11 (50)は(49)とほぼ同タイプの須恵器の壺身である。

S K 2 (51)はかえりをもたない須恵器の壺蓋と考えられる。口径約10cmを測り、後述の f 類に含まれる。口縁部が外反するタイプで、型式的には蓋受けのたちあがりをもつ壺身に見られるものである。口縁部外面には重ね焼きによるものと考えられる破片が付着している。

c . 包含層

須恵器

壺蓋 e 類 既述の a ~ d により古い形式のもので、口径約14cm、器高約4cm前後の法量をもつ。陶邑MT230、MT5等に類品が見られる。体部の約1/3程度上位までへラケズリ痕が残る—(52)~(54)

壺蓋 f 類 e 類の同タイプで、口径約9.5cm、器高約3cm前後の小さな法量をもつものである—(55)~(58)(55)は他に比して体部の内窓が小さく、天井部からの屈曲が大きくなっている。

壺蓋 a 類 かえりの端部が口縁端部より出るもので、高くシャープなつまみが付く—(59)~(62)

坏蓋 b 類 かえりの端部が口縁端部より出ないもので、a 類に比して、つまみがやや低くなる。—(65)・(66)

坏蓋 c 類 b 類の法量が大型化し、口径13cm～15cm程度となるもので、つまみは偏平となるタイプが多い—(63)・(64)・(67)・(68)

坏蓋 d 類 かえりが消失し、端部が直立するもので、つまみは偏平となる—(69)～(72)

(72)は体部の丸味が消失し、かなり肉厚となる。

坏身 e 類 坏蓋 e 類に対応するもので、蓋受けのたちあがりが大きく、口径約12cm、器高約4cm前後の法量をもつ。体部約1/3下位程度までヘラケズリ痕が残る—(73)～(76)・(78)～(82)

坏身 f 類 坏蓋 f 類に対応するもので、蓋受けのたちあがりが小さくなり、口径約10cm程度に小型化する—(77)・(83)～(85)

坏身 a 類 坏蓋の a・b 類に対応するもので、蓋受けのたちあがりを消失し、口径約10cm程度の法量をもつタイプ—(87)～(91)

坏身 b 類 坏蓋の c 類に対応するもので、a 類と同タイプ。口径約14cm程度の大きな法量をもつものである。—(86)

坏身 c 類 坏蓋 c・d 類に対応するもので、高台が付くタイプである。—(92)～(102)

(103)～(105)は高坏で、坏部口径約11cm、坏部器高約4cmを測る。坏部のタイプは胸邑MT84等に近いものである。(103)の底部及び脚柱部にはカキ目を残す。(105)については別器種となる可能性がある。

(106)・(107)・(109)～(111)は短頸壺である。(106)は頸部が極めて短く、ナデ調整がていねいに施されている。(107)・(109)はやや長い頸部をもち、肩の張るタイプである。

(108)は壺と考えられる体部片である。肩部の張るタイプで、肩部及び体部に沈線が廻り、その間に刺突烈点を配する。ていねいなナデ調整が施される。

(112)～(129)は壺・壺類である。

(112)は僅かに内傾する直立口縁を有するもので、口径約15.5cmに比して口縁部高約2cmと短く、短頸壺の範疇に含まれる。外面体部の叩き目は粗を呈する。

(113)の口縁部片は、瓶と考えられる。強い輪轍ナデ調整による凹凸が顕著に見られる。

他の口縁部片は、いずれもくの字状に外反する甕と考えられる。型式的に4つに分けることができる。

①口縁部が直線的に斜向外上方に伸びるもの—(115)・(116)

②口縁部の外反が比較的大きく、端部は尖り気味におさまり、一部垂下している—(121)・(122)

③外反した口縁部が、端部で小さく内彎し、平坦面を形成しておさめるもの—(126)～(129)

④外反して、口縁端部を肥厚させて丸くおさめるもの—(114)・(125)

(124)は①類に近いものであるが、端部内外面に小さな肥厚部をもち、尖り気味におさめている。

(123)は①類と③類の要素をもつもので、外反した口縁部は端部において更に急角度をもって外反する。

(117)～(120)は底部片である。いずれも体部外面はヘラケズリされ、底部は不調整である。明確な上部は把握し得なかった。(117)の高台は貼付けている。

(130)は脇で、口縁端部を欠損する他は完形の出土である。ラッパ状に開く口縁部には櫛描文が配され、体部に穿つ円孔位には刺突烈点が廻る。

(131)は平瓶で、口縁部を欠損する他は完形の出土である。体部上面の中央部に円形浮文を貼付ける。体部上半はヨコナデ調整で、カキ目が明瞭に残り、下半はヘラケズリしている。

(132)は円面観の底部片である。裾開きの脚部には貼付突帯が廻り、その上部に長方形の透かし部分はていねいに成形され、一部面取り等の調整も施されている。

(133)・(137)は土師質土器の皿である。(133)は口径約15.5cm、器高約2.5cm、(137)は口径約10.5cm、器高約2cmを測る。いずれも底部は不調整である。

¹⁹(135)は底部に糸切り痕をもつ土師器の皿で、口径約10.5cm、器高約2.3cmを測る。法量に比してかなり肉厚な成形である。

(134)は土師質の大皿で口径約29cm器高約6cmを測る。肉厚の高い貼付け高台を有す。施釉されていた可能性もあるが、摩耗され判然としない。

(136)・(138)・(139)は土師器の壇である。いずれも摩耗が激しく、調整等は判然としない。緑釉陶器の可能性を残す。(136)の底部外面には糸切り痕が観察される。

(140)～(143)は緑釉陶器である。(142)は須恵質の胎上で、釉色は濃黄緑を示す。高台等の成形は粗雑である。他はいずれも上師質の胎上で、淡黄緑の釉色を示す。高台端部に段をなす。所謂近江産といわれる形態を呈する。

(144)・(145)は無釉陶器である。(144)は口径約14cm、器高約5.5cmの法量をもつ壇で、ていねいなナデ調整によって、肉薄に成形される。口縁端部の2ヶ所に輪花が観察されるが、完形復元時には4ヶ所となる可能性が強い。(145)は口径11.5、器高2.2cmを測る皿で、高台は貼付けている。底部外面には糸切り痕が残る。

(146)は信楽焼の擂鉢と考えられるが、破片のため、全形状は判然としない。擂目が間隔をもって配される古いタイプを想定する。 (清水・氏丸)

5. 小 結

a. 造構立地の在り方

当地区検出の造構群は既述の通り、その立地より2つに大別される。旧生活面と考えられる粘質上面は、J-2区よりE-5区に向って約10cm幅で残り、両側は野洲川等の河川氾濫によって疊原と化している。しかし、琵琶湖やそれに注ぐ河川を多く抱える近江では、集落を営むための立地条件の良い地域は限られたものであり、琵琶湖周辺の湿地帯及び大きな河川との隣接地域等における氾濫後の疊堆積は、むしろ利用価値の高いものであったに相違ない。また建物は、中の空間容量よりも河川氾濫時において、ある程度までは十分にたえうるという耐久性を重視した柱の建物が必要であった。この地区的建物、殊にSB2には、そのような集落經營の一端を垣間見ることができよう。

氾濫の流路は東側から西側へ向っていると推察される。粘質上面より南側は疊量が少なく、立地造構から出土遺物より、やや古い時期の氾濫による疊原であると考えられる。また北側は疊量が多量で、立地造構出土遺物より、粘質土面の南側及び粘質土面より新しい時期の浸食による疊原であると考えられる。

b. 造構・遺物の年代観

当地区より出土した遺物は大別すると3時期に把握される。(A)第1造構面のSK

1 出土遺物の年代 (B)第2遺構面のSD4出土遺物の年代 (C)第2遺構面のSD10・11出土遺物の年代である。

(A)におけるSK1の一括出土の土師質土器は、平安京三条大路側構N出土遺物の範囲におさまる年代観を得ることができる。ほぼ11世紀後半より12世紀初期と考えられる。SD2出土の土師質小皿も同様の時期に比定され、第1遺構面の年代観はこの時期に求めることができよう。SX1の高杯類はその出土状況が特異であり、必ずしも第1遺構面の年代と一致するものではない。顯著な摩耗痕より流失遺物である可能性もあり、また直上の包含層の把えられることも可能性の域をこえるものでなく、明確に把握するに到らない。遺物自体には6世紀代の年代が推察される。

(B)は第2遺構面の年代観と把えられる。

SD4出土の遺物群を基準に、SB1、SD3、SK2～4等の時期が若干遅り、SB2等砾原立地の遺構群がほぼ同様の時期に比定される。SD4出土遺物は7世紀第4四半世紀から8世紀初期におさまる年代観が得られるであろう。大津宮、藤原宮出土の須恵器とおよそ同一タイプのものが主体をなし、当地域におけるこの時期の編年的示標となる一括出土の遺物である。

(C)にはSD10・11出土の須恵器より6世紀後半代の年代観を把えたい。調査区の南側の遺構は、古墳時代のものと考えられる。この時期の遺物は包含層から多量に出土している。

(清水)

註

- (1) (21)については器高が極端に低くなる可能性が強く、坏蓋以外の器種をも考慮しなければならない。
- (2) 平安学園考古クラブ「陶邑古窯址群」(1966) 以下、把握し得る範囲で古窯名を対比させた。
- (3) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」Ⅷ(1976)
- (4) 古代学協会「三条西殿跡－平安京跡研究調査報告」第7輯(1983)

結び

最後に、簡単に井戸遺跡の発掘調査によって得られた成果をまとめ本書の結びとしたい。

今回、県立甲西高校建設に伴ない発掘調査を実施した甲西町針新田は、野洲川に上って運ばれてきた氾濫堆積土壌上に立地していた。

従来より周辺丘陵部には古代寺院跡や古墳が多数点在していることが確認されていたが、その時代の生活の場である集落跡は、当然のごとく想定できるはずであった野洲川をはさむ两岸辺りの沖積地には、集落跡は周知されていなかった。今回の発掘調査ではそのもっとも野洲川辺りで二時期、二遺跡が確認されている。まず擁壁部のトレンチではその東端をかすめる様に、他の遺構面より一段高い自然の微高地が検出され、現況でもそれを追うように周辺部に、水田が一段他の水田より高くなっている部分が広がっていた。その微高地上で、堅穴住居跡二棟を含む布留式土器が出土する遺構群が検出できた。憶らくこの微高地上の中心に集落が存在するものと思われる。今回の調査ではその縁辺部を確認したことになる。

さらに、その他の調査区では本来の井戸遺跡となる、掘立柱建物・溝・土壙等の遺構群が検出された。遺跡の年代は前述のとおり、遺物からみて6世紀前半には成立しており、中心は7世紀～8世紀と思われる。特に検出された遺構をみてみると住居跡を示すものではなく溝と土器留り、総柱の倉庫跡と思われるものだけであり、そのためか遺物も、その中心は杯類であり杯・高杯が多く、次いで縁・壺・甕が多く煮沸土器、土師器は須恵器に比べて少なかった、また特異なものとして円面鏡も出土している。これらのことや倉庫の位置から考えて調査は、生活の中心からはずれた部分であることがうかがえる。

以上が、今回の発掘調査によって明らかになった成果であるが、今ここで近江の歴史に於ける7世紀前後の社会状勢を考えてみると、歴史上重要な事件が起きている。日本史上最初に起った天皇家どうしの後嗣争いであった壬申の乱である。この壬申の乱は広く知られる通り、大化改新クーデターを起こした天智天皇の死後、後繼者である太子大友皇子に対し、弟大海上皇子が反旗を翻し、近江・大和を中心に伊勢・伊

賀・美濃等をまき込んだ当時の政治中枢を二分する争乱であった。当然のごとく戦いのほとんどは近江のいずれかの場所で行なわれている。

湖南地方でも戦いの終わり間近い672年7月13日に安河の戦、7月17日に栗太、7月22日に瀬田とその明暗を分ける決戦が行なわれているわけであるが、それより早く6月25日に大海人皇子は大津・高市皇子に大津京からのがれ積殖山川、鈴鹿郡家で落ち合うよう指示しているが、この両皇子が通った経路が野洲川を上流に上り伊勢に出る道であった。さらにそれらの大海人軍を倉歴でうつべく大友軍（田辺小偶隊）は7月5日に同じ経路を行軍している、そしてこの道筋近くに井戸遺跡は存在していた。

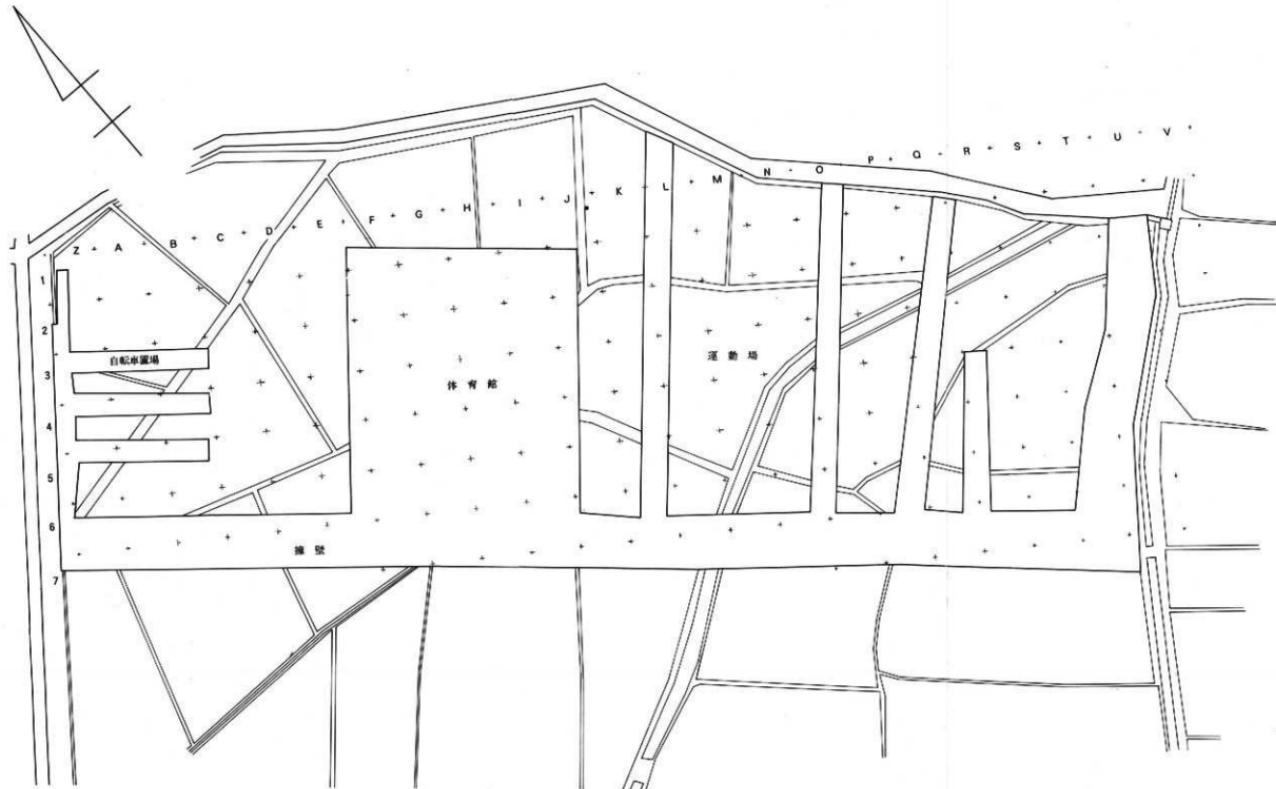
壬申の乱は結果、大海人皇子が勝利を得ているわけであるが、それは行く先々で中・小豪族の支持を得、軍勢を肥大させていったからといわれており、また伊勢回りを通ったのも、血縁関係の人間が多く住む土地を通過することによって子勢をかうためでもあったはずである。逆に大友皇子の軍勢は宮を中心とする貴族や官僚を中心として編成されていたはずであった。

これらのことから話をもどすと次のようになる、つまり大津・高市皇子は大津宮より逃げるようになって来たはずであり、憶らくそれは夜行軍であった可能性があり、それに対し、同じように進路をとった大友軍は息止る初戦の頃であり、雄々の真昼の進軍であったはずである（それを示すように、夜襲をかけ倉歴を突破している）。それに加えて、両皇子がとった大津の宮への近道を大海人軍は一軍とも通ってはいなかつたことである。つまり野洲川流域・半賀までの道筋は当時、大友皇子の勢力下にあり、この地を圧迫する有力貴族は憶らく官方に付いていたのではないだろうかということである。

これらの歴史的事実と同時平行してきた野洲川流域に存在している井戸遺跡は、今回の調査でその一端であるが、その遺跡自身の規模を推定すると、十分、有力貴族や倉群等の遺跡である可能性もあり、それゆえに遺跡の性格を知る上で今後に大きな課題を残していくものと思われる。

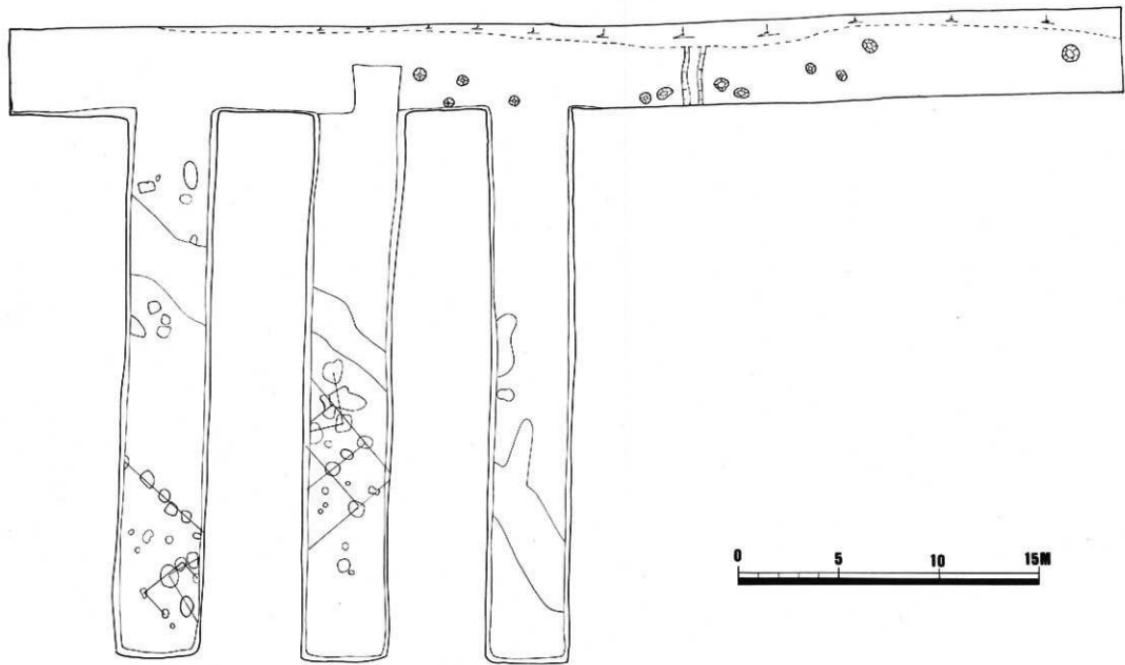
いずれにせよ、甲西町の歴史を語る上でこの井戸遺跡は今後重要な位置を占めてくるものと思われる。

図版一 トレンチ配置図

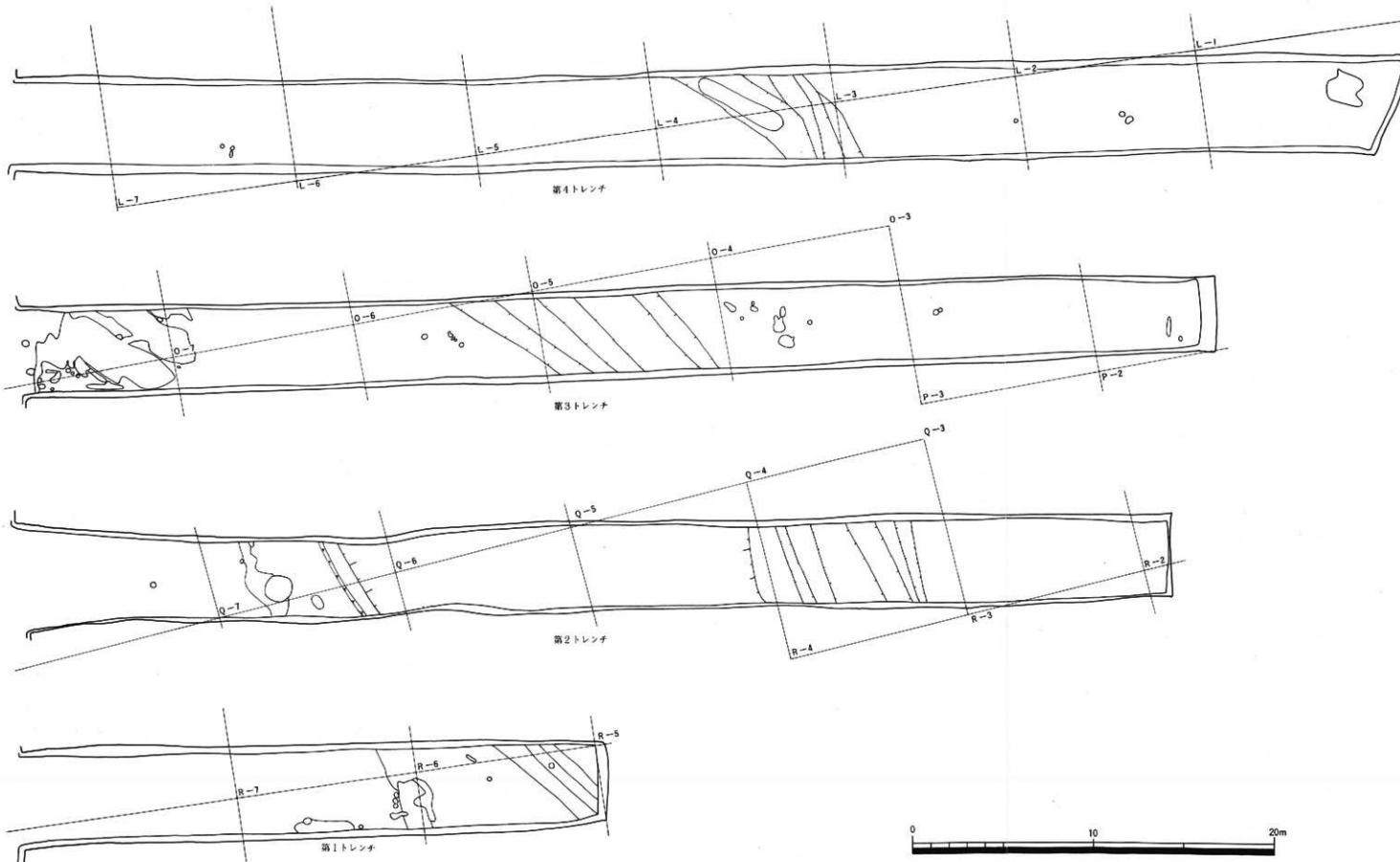


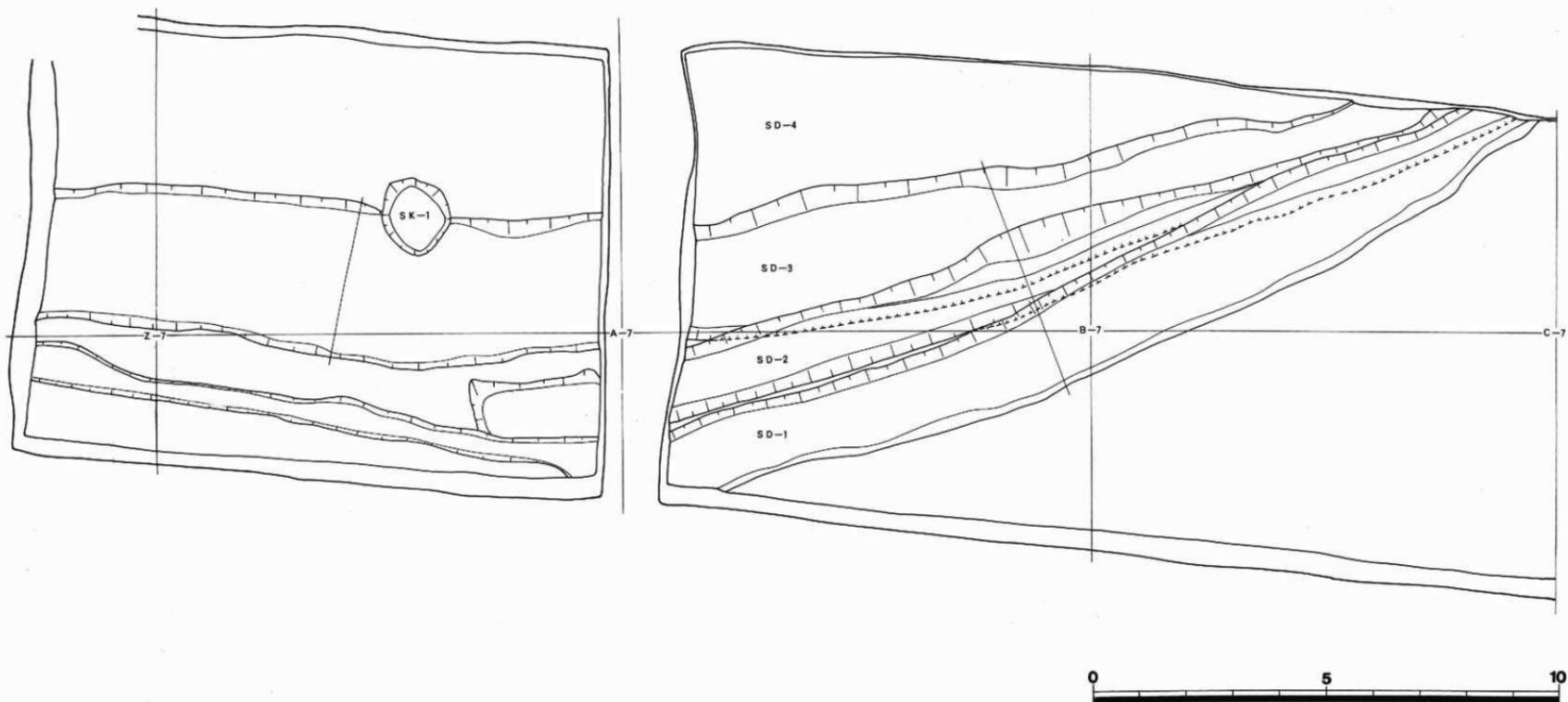
0 50 100m

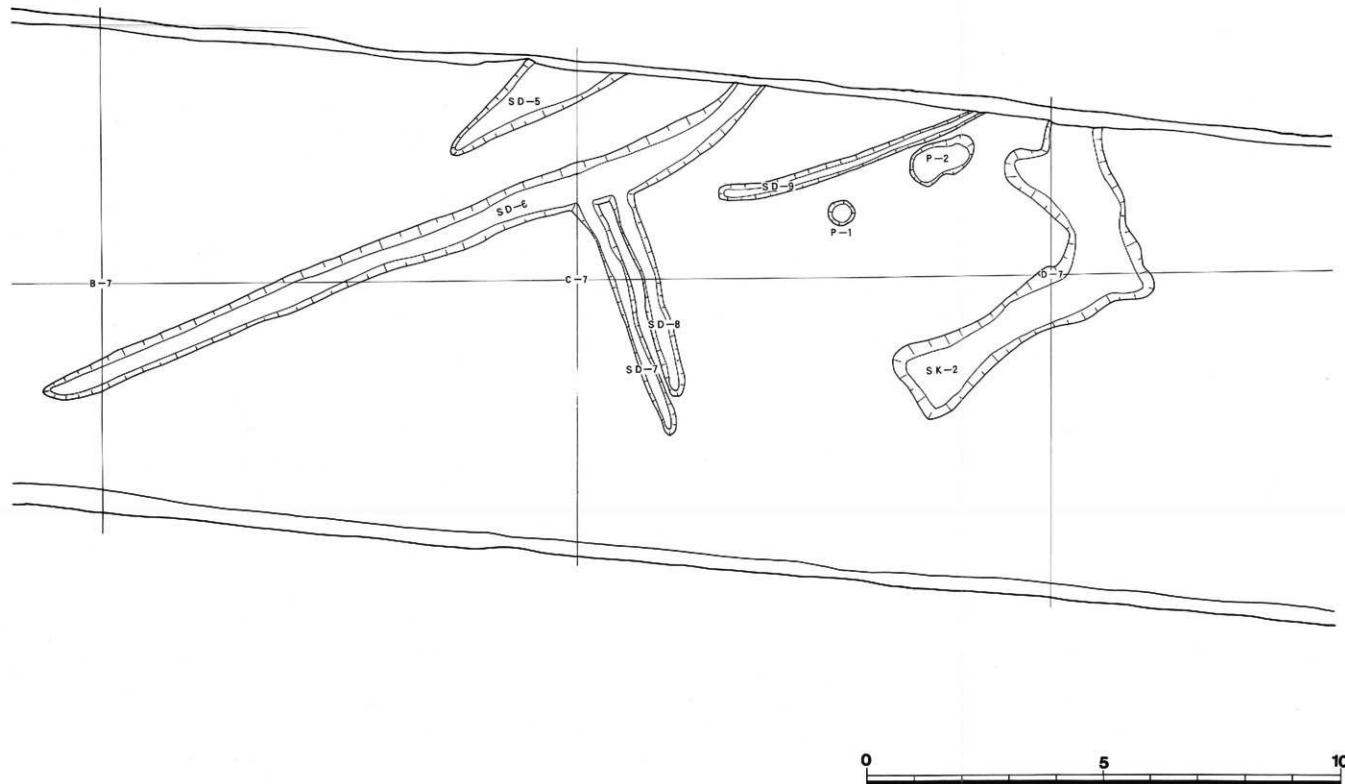
図版二 自転車置場調査区遺構図

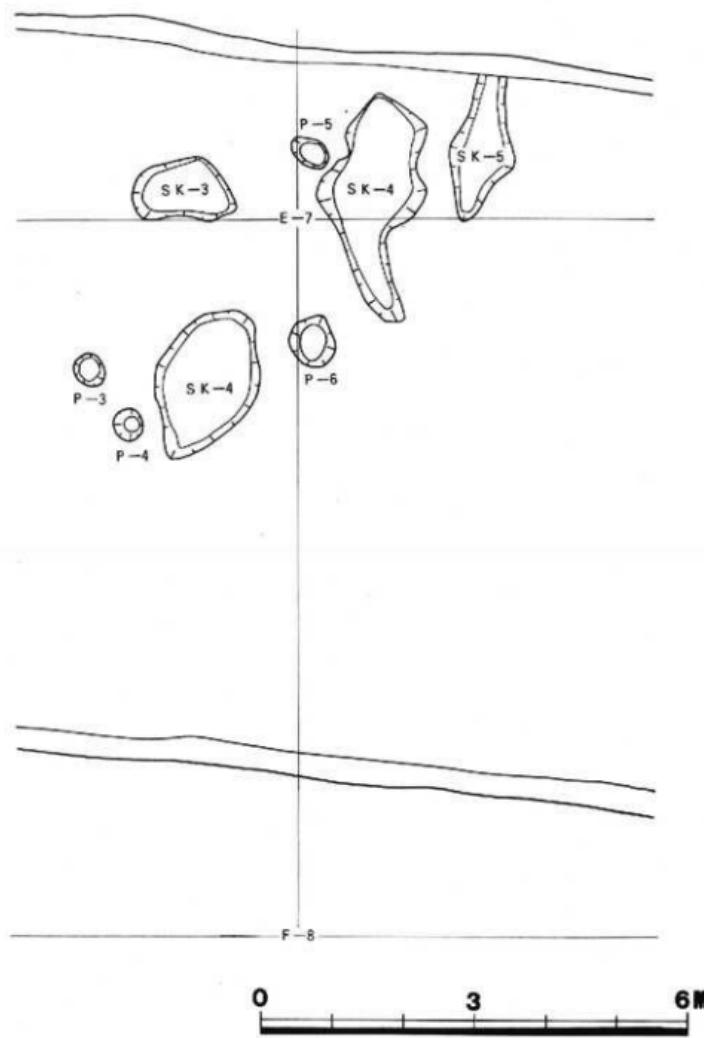


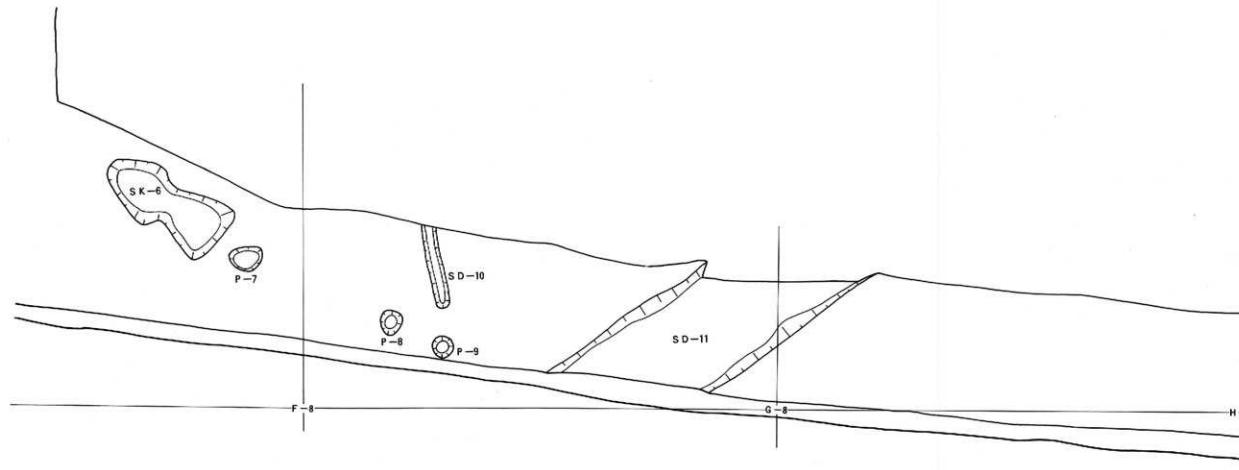
図版三 運動場調査区道路図



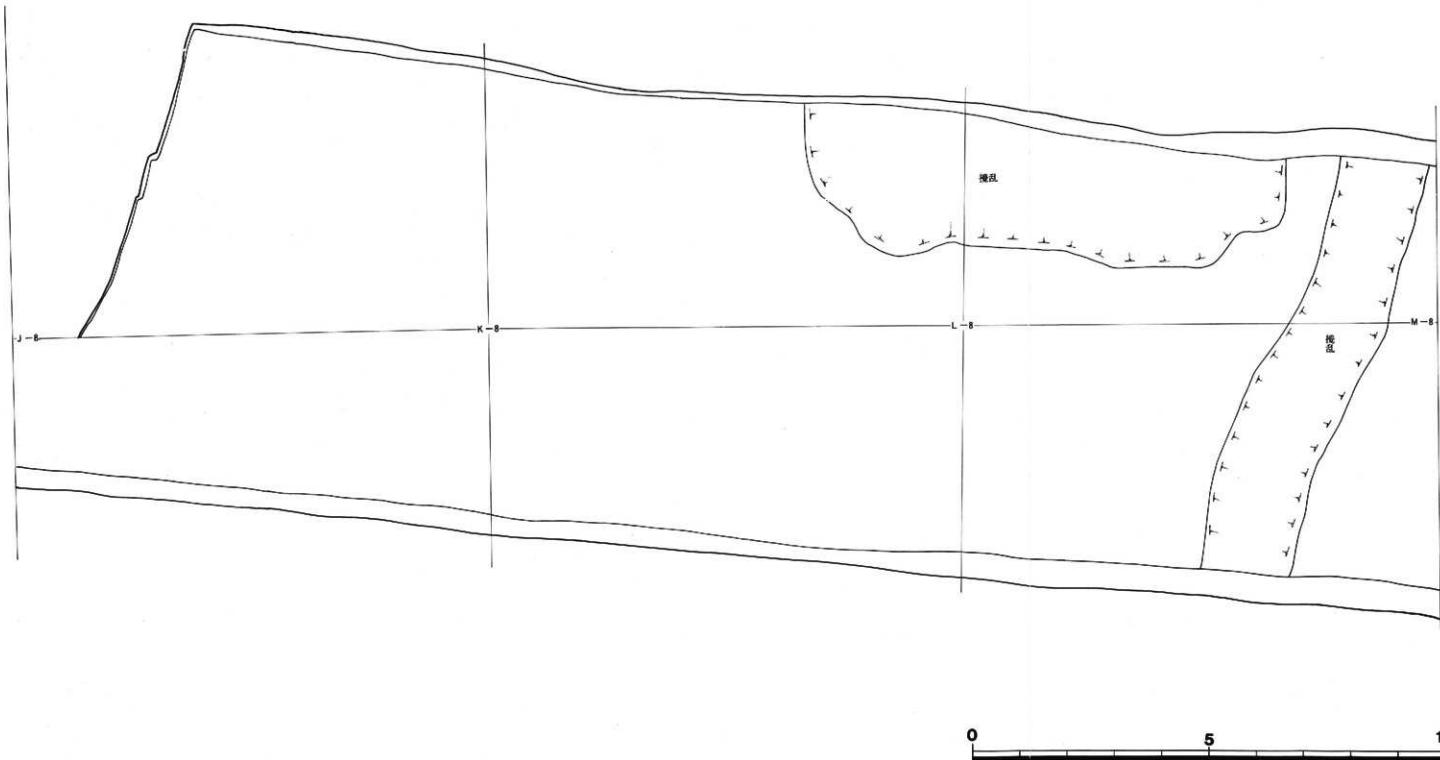


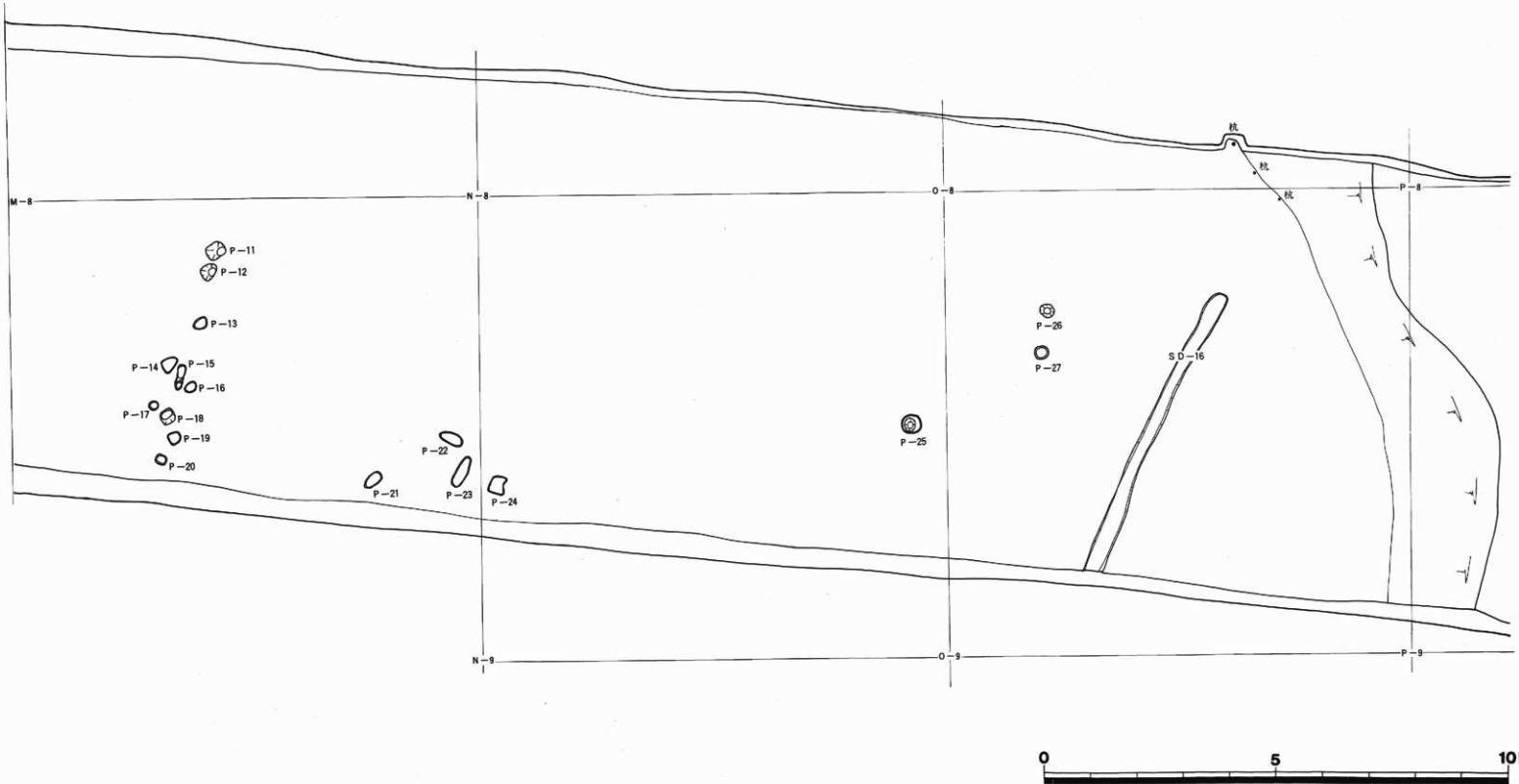


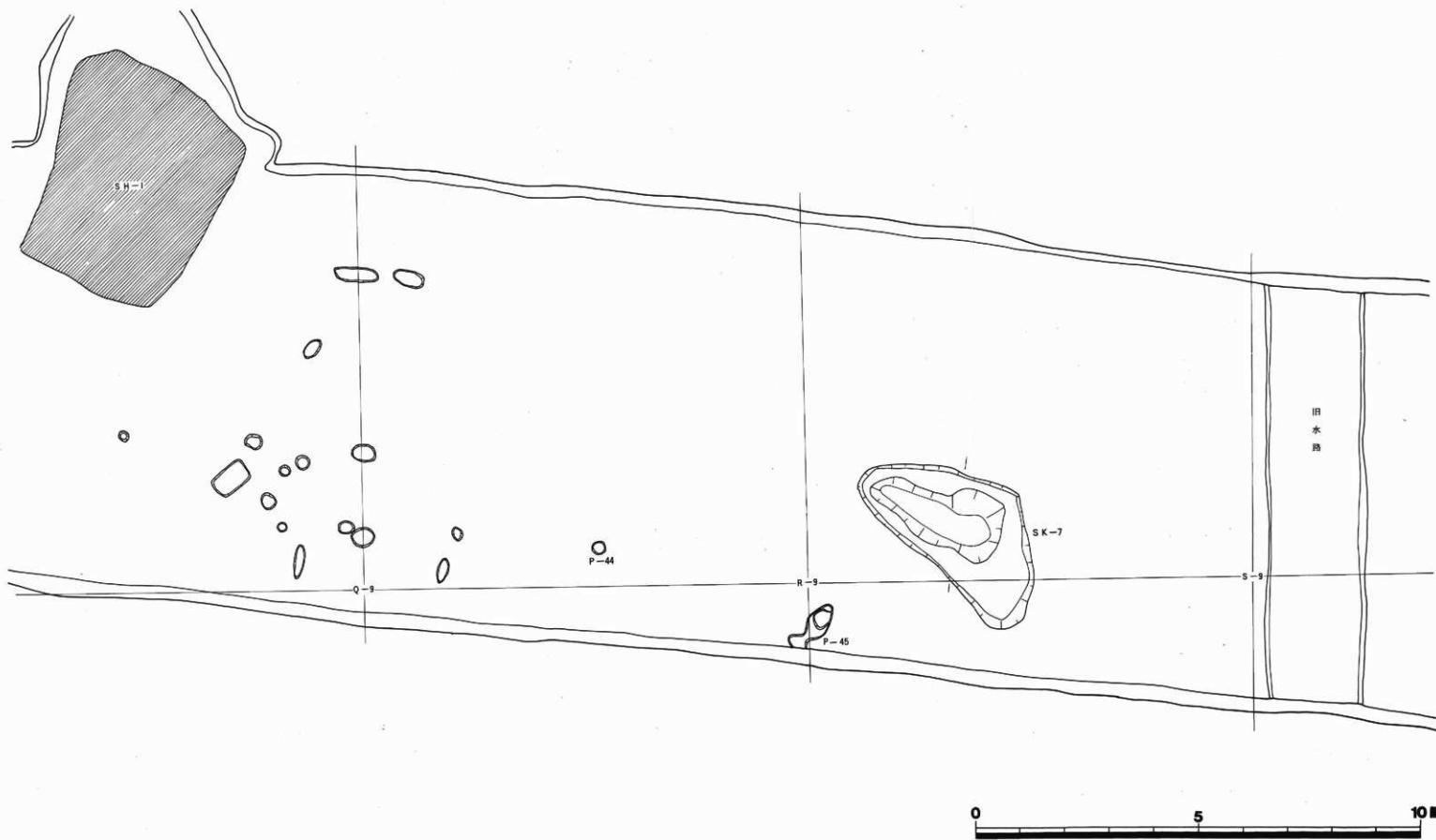


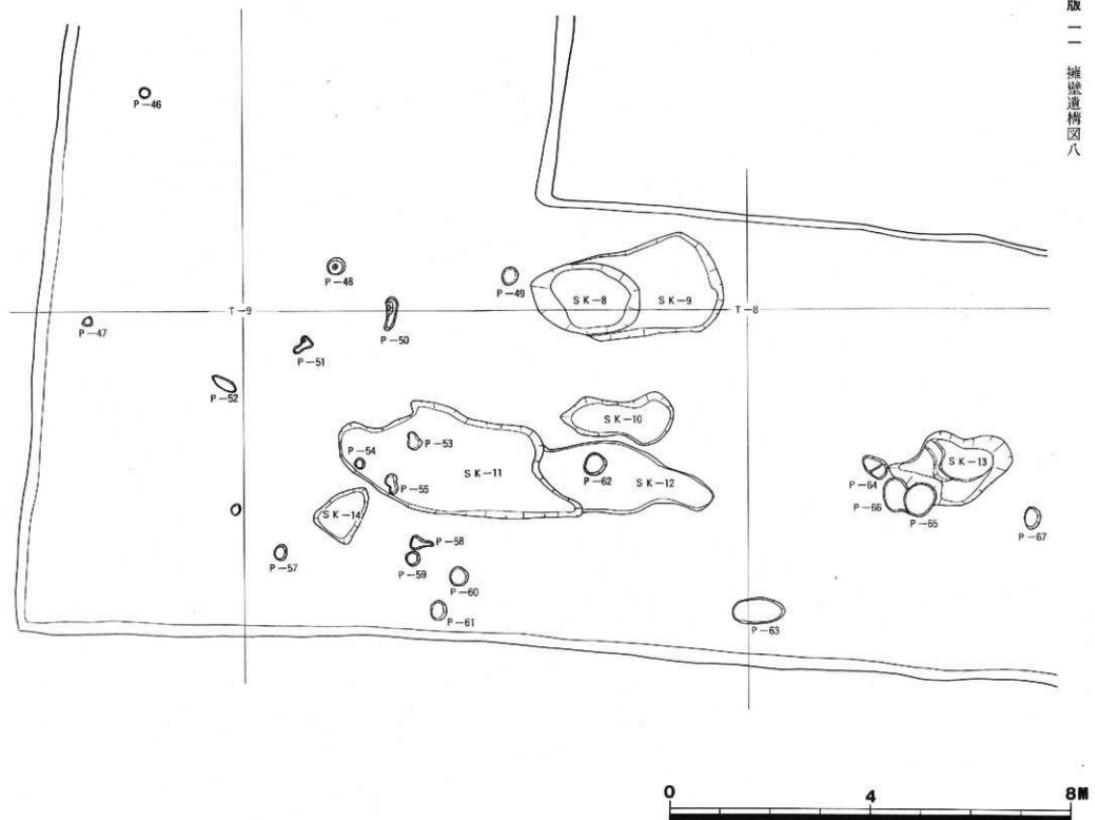


0 5 10 m

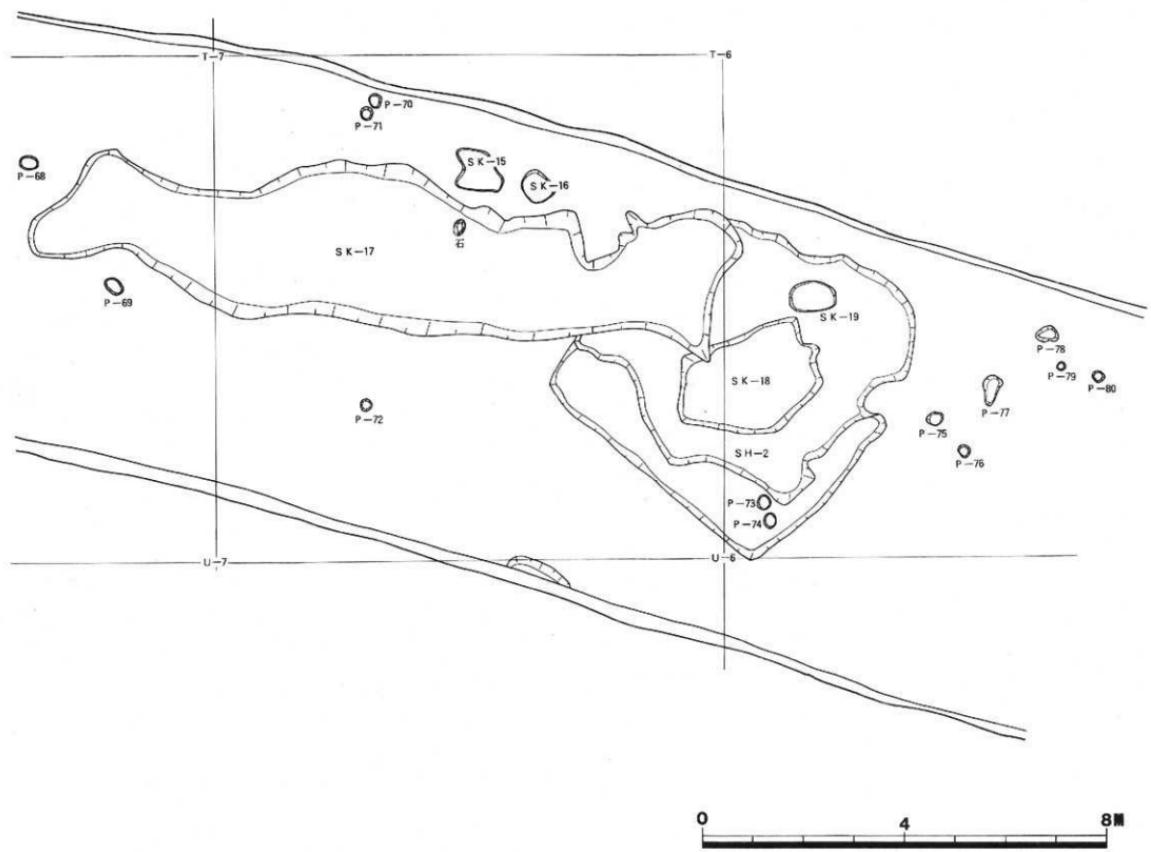


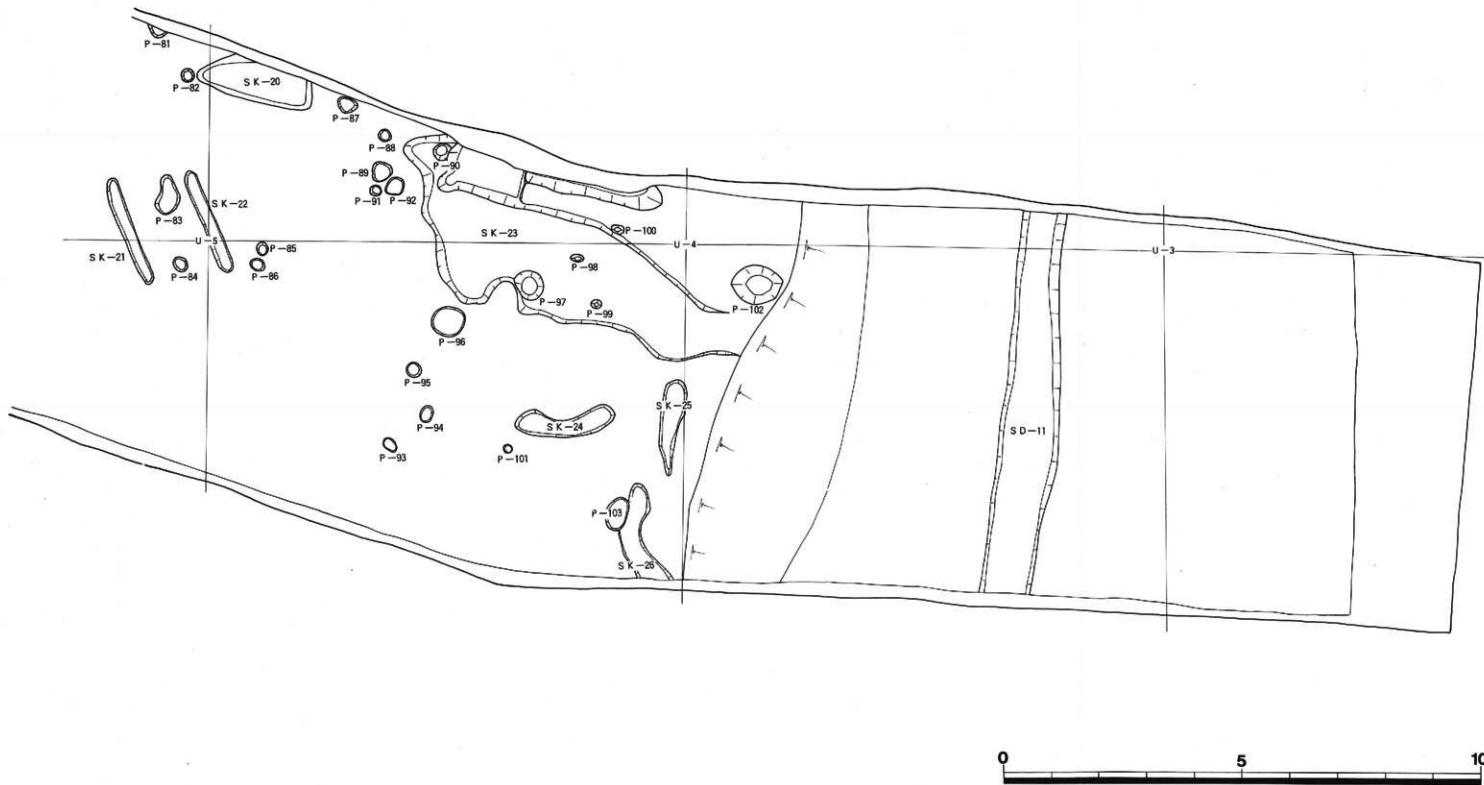


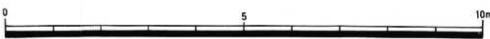
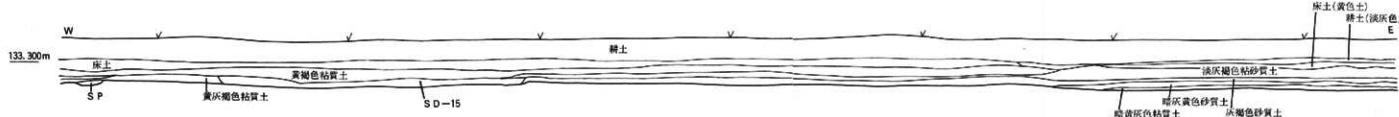
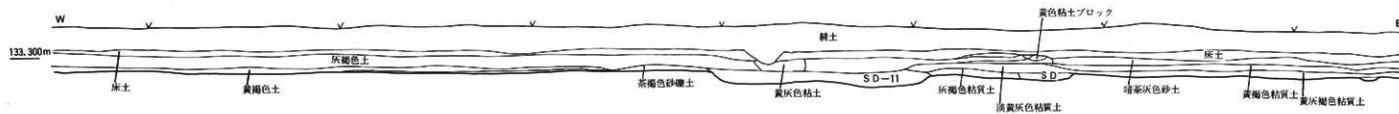
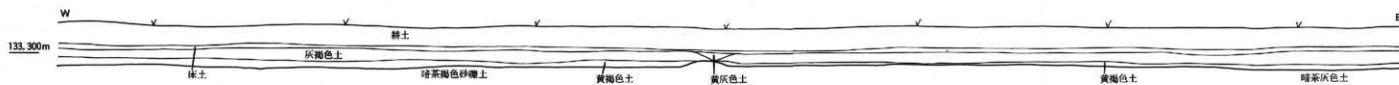
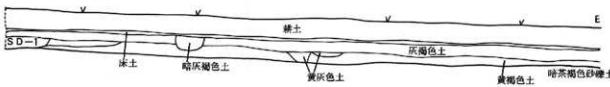
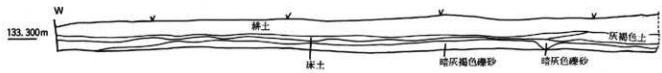




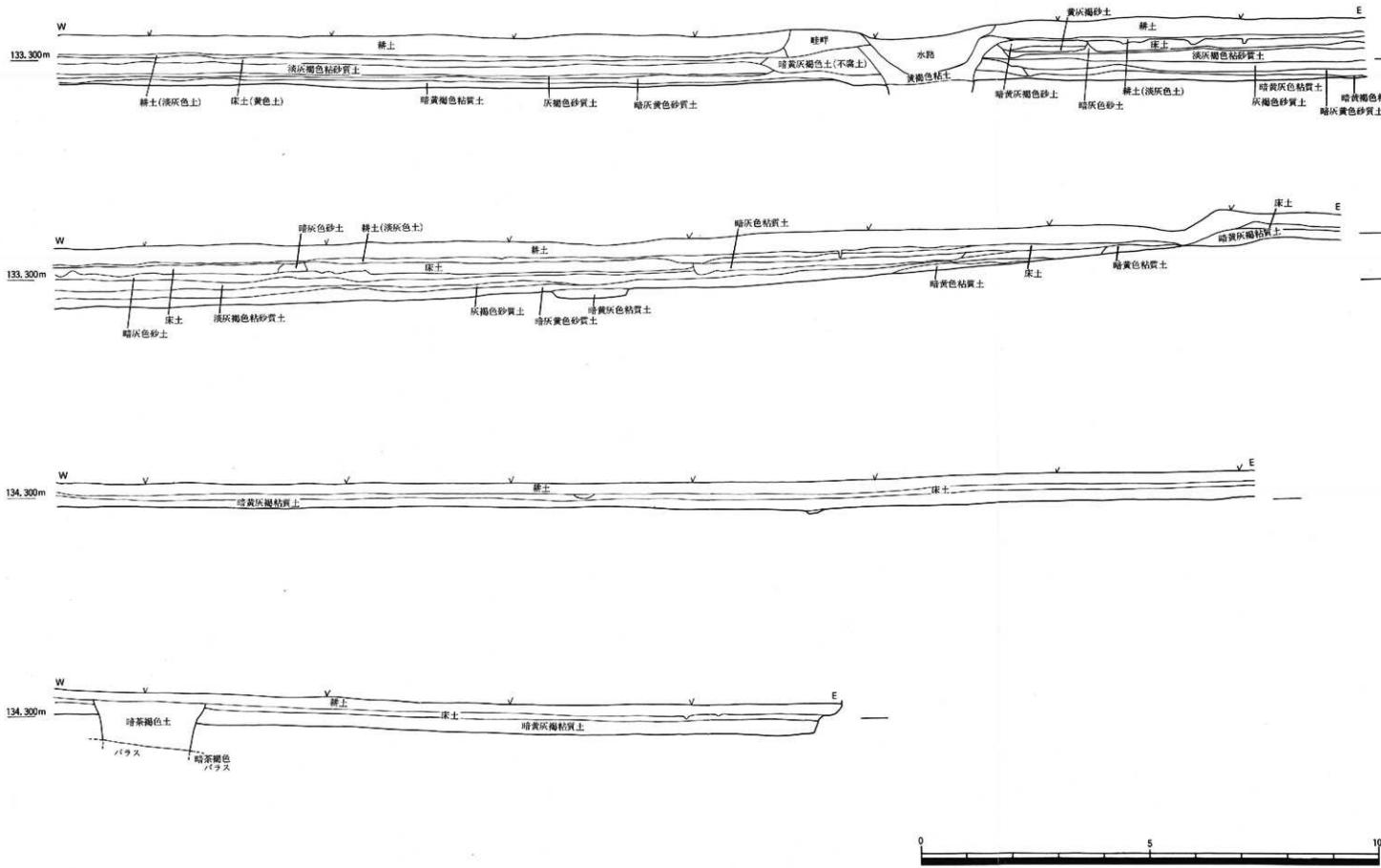
図版一二 摺壓遺構図九

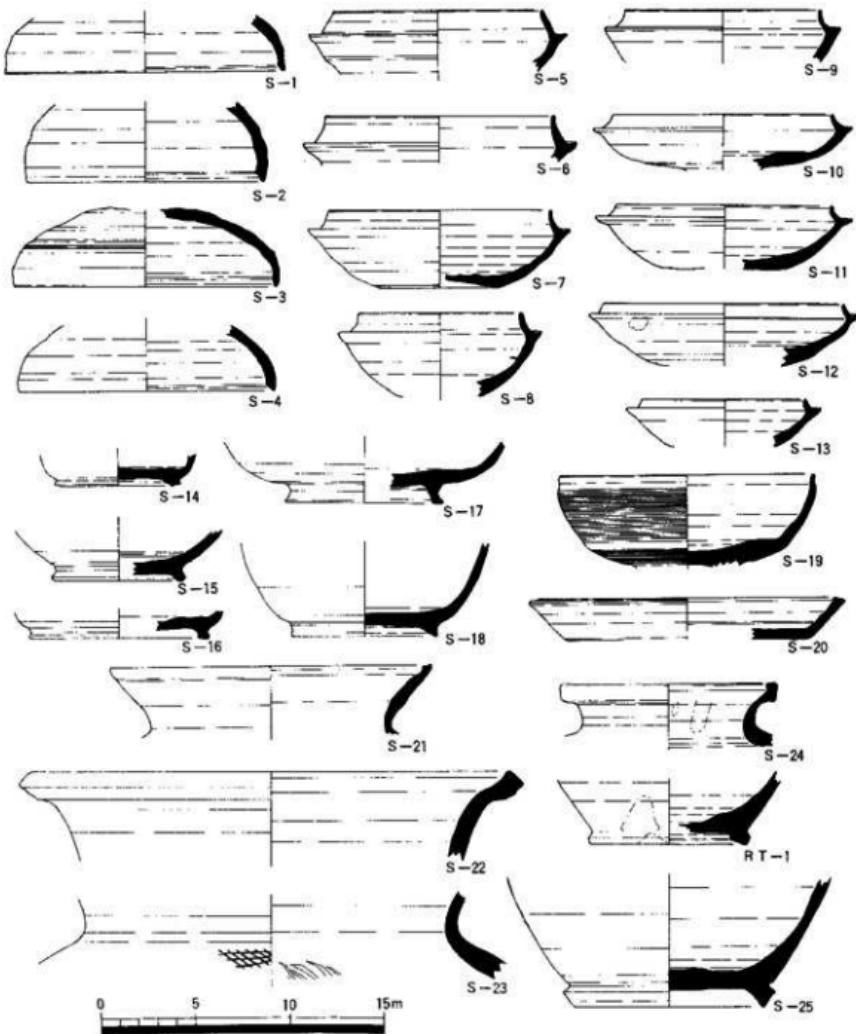




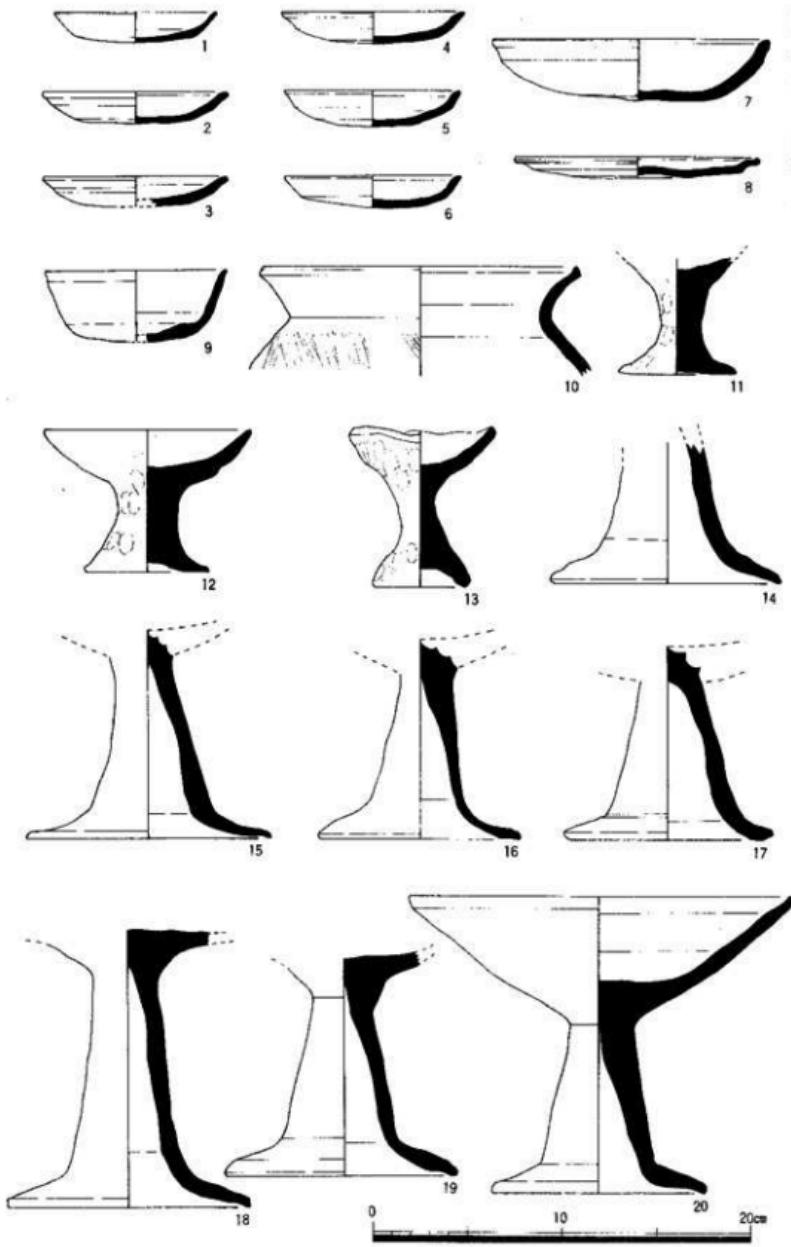


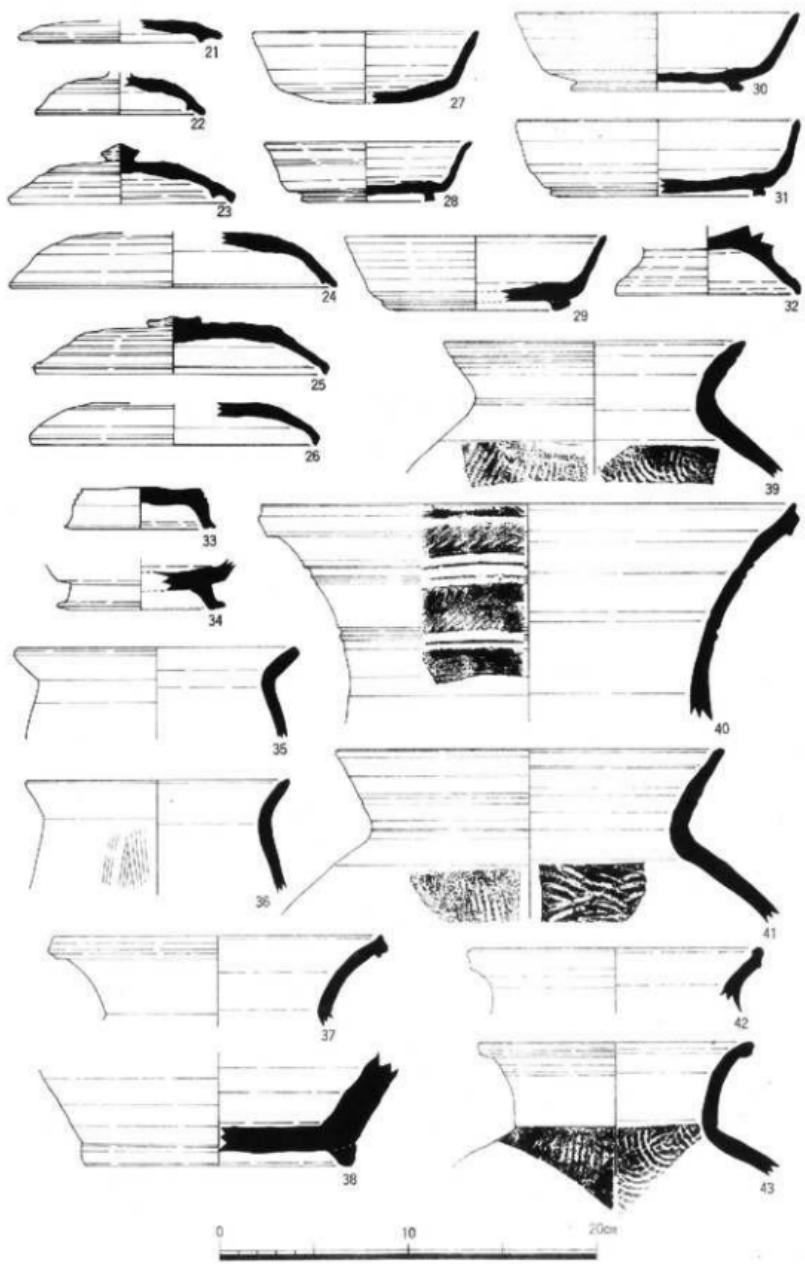
図版
五
擁壁層位図一

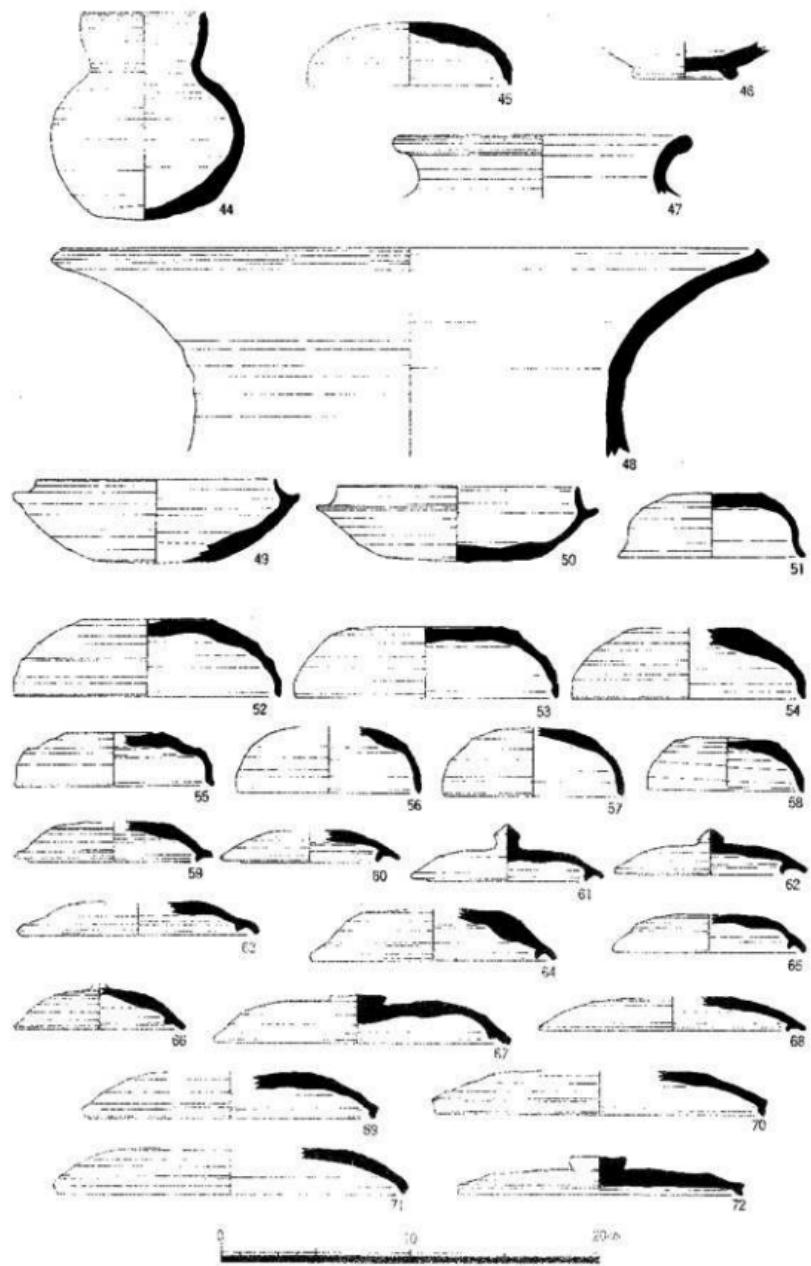


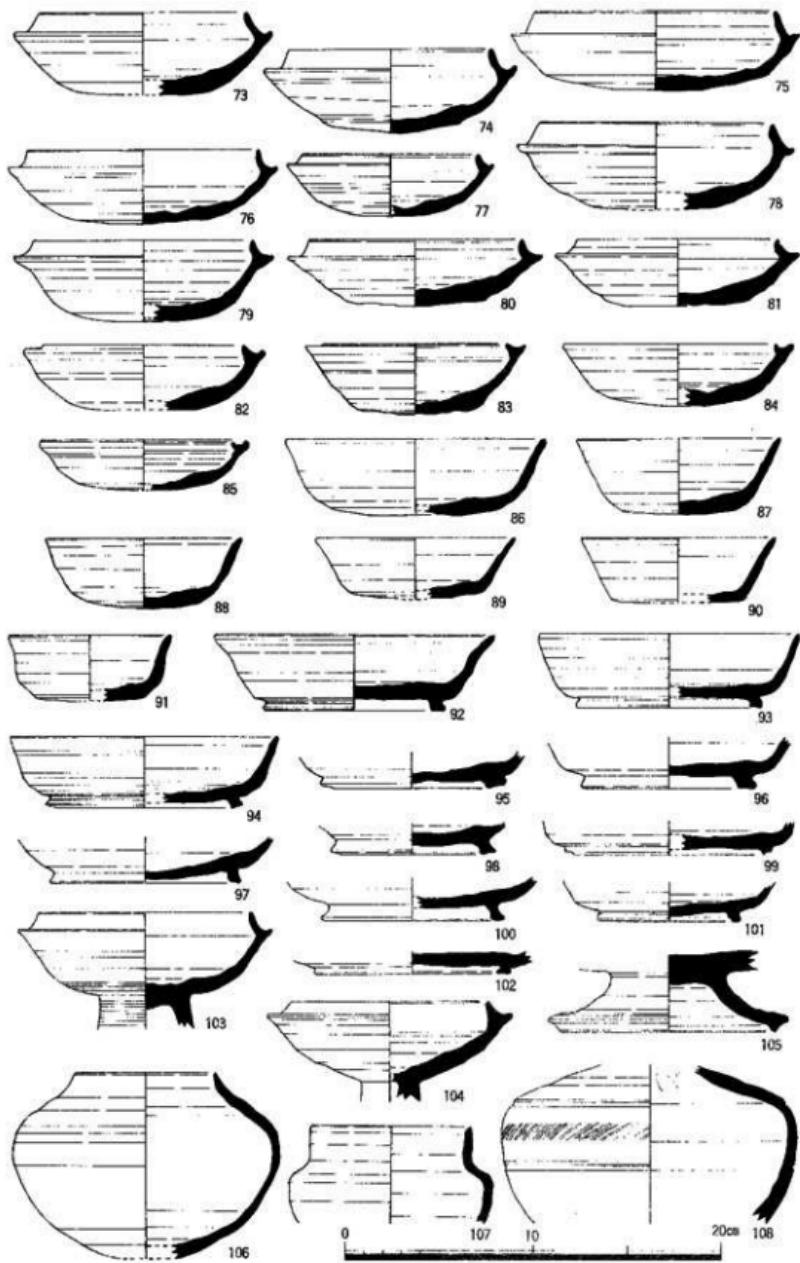


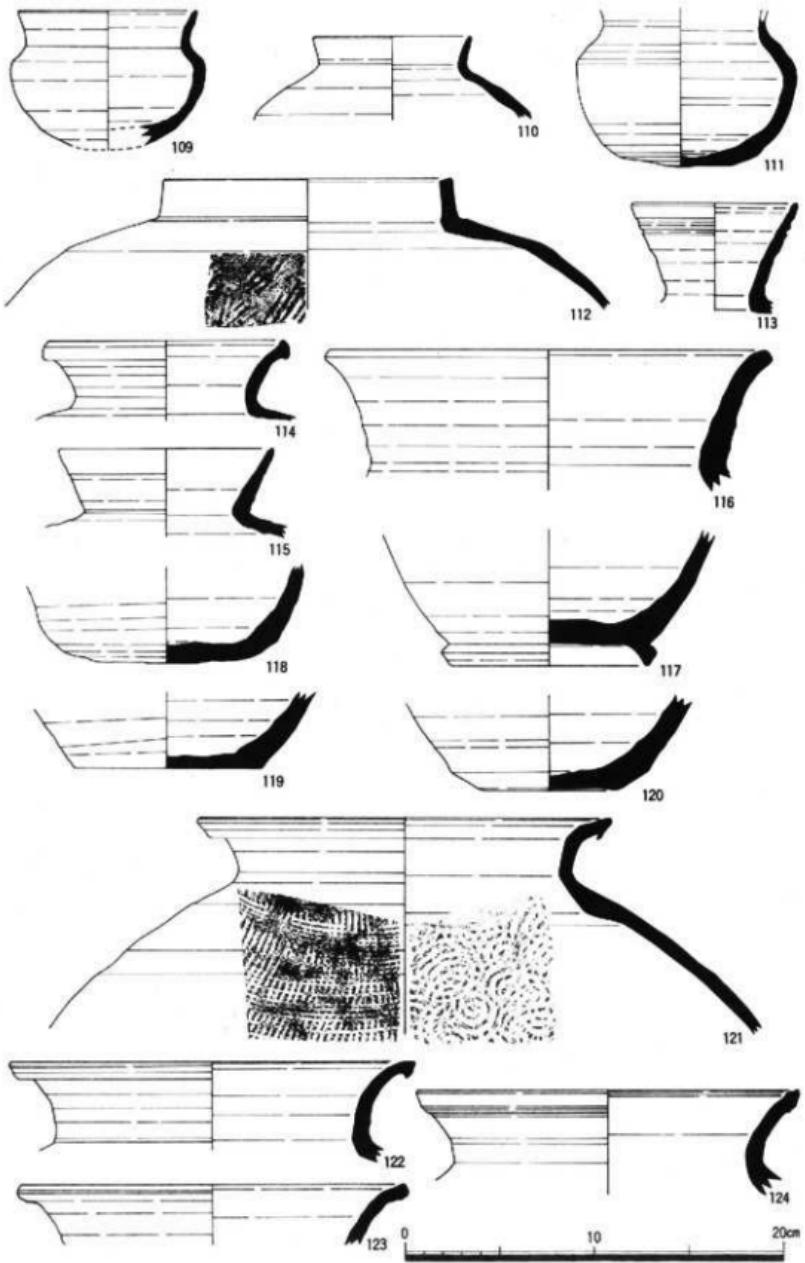
SD-1 (S-23), SD-2 (S-2, 3, 4, 11, 24, 25), SD-3 (S-1), SD-4 (S-5, 6), D-6, SK-1 (S-12),
1トレンチ(S-13, 15, 16, 17, 22), 2トレンチ(S-18), 5トレンチ(S-8, 10, 26), 6トレンチ(S-9, 20, 21),
8トレンチ(S-7)

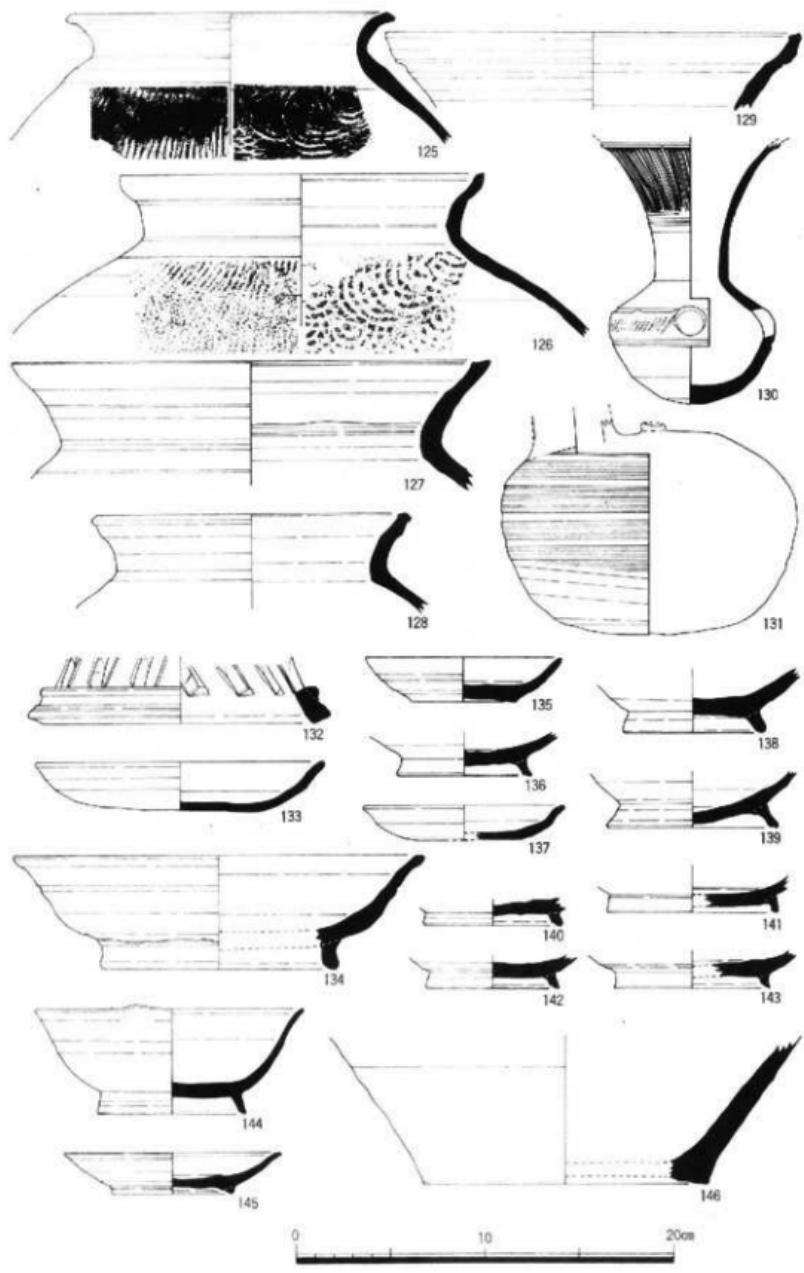






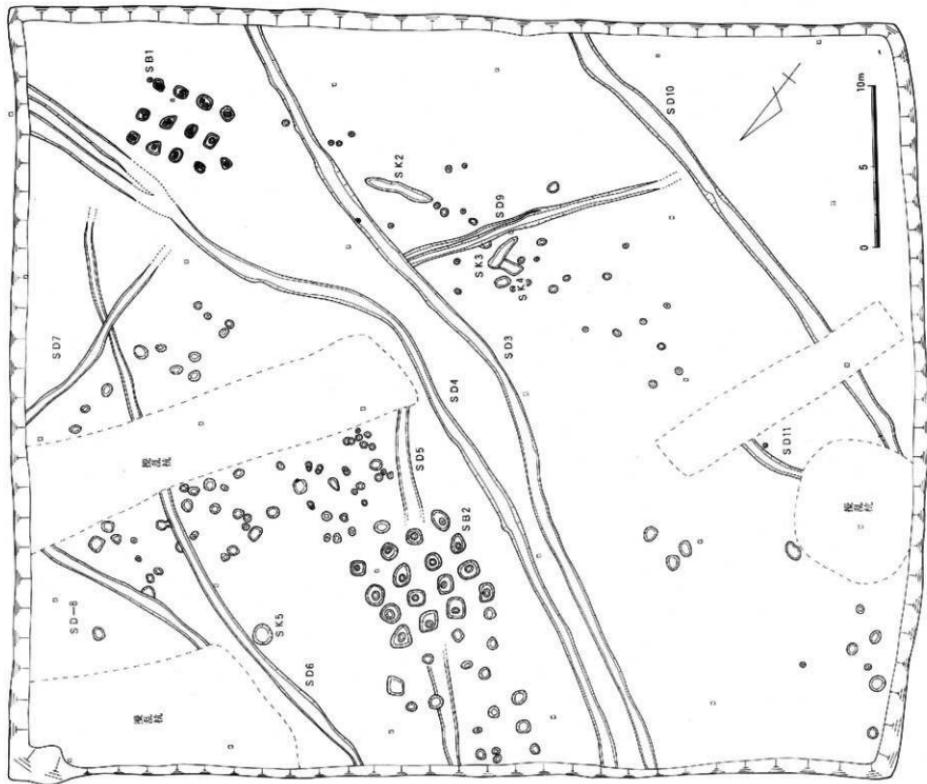






0 10 20cm

図版 III-1 遺構平面図





1 自転車置場 5トレ・6トレ遺構検出状況



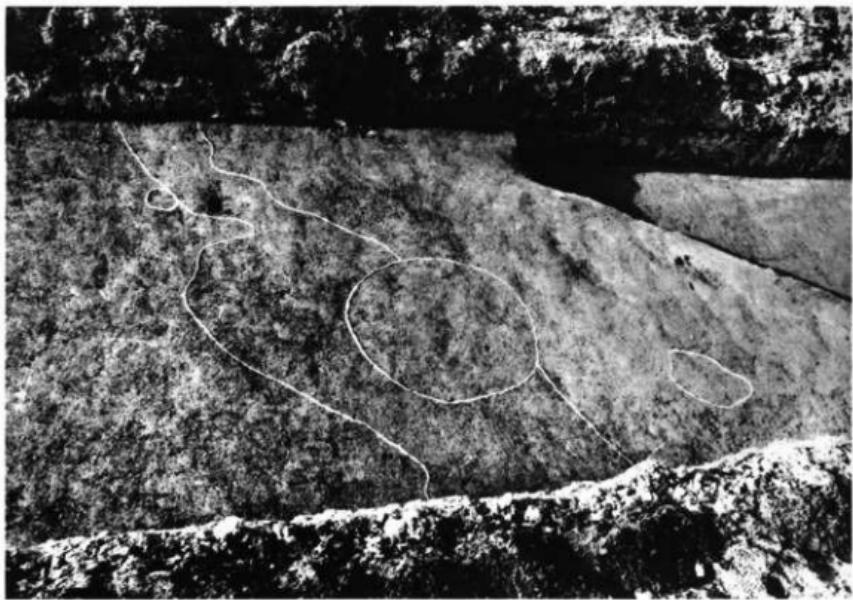
2 自転車置場 6トレ遺構検出状況



1 自転車置場 7 トレ遺構検出状況



2 自転車置場 7 トレ遺構検出状況



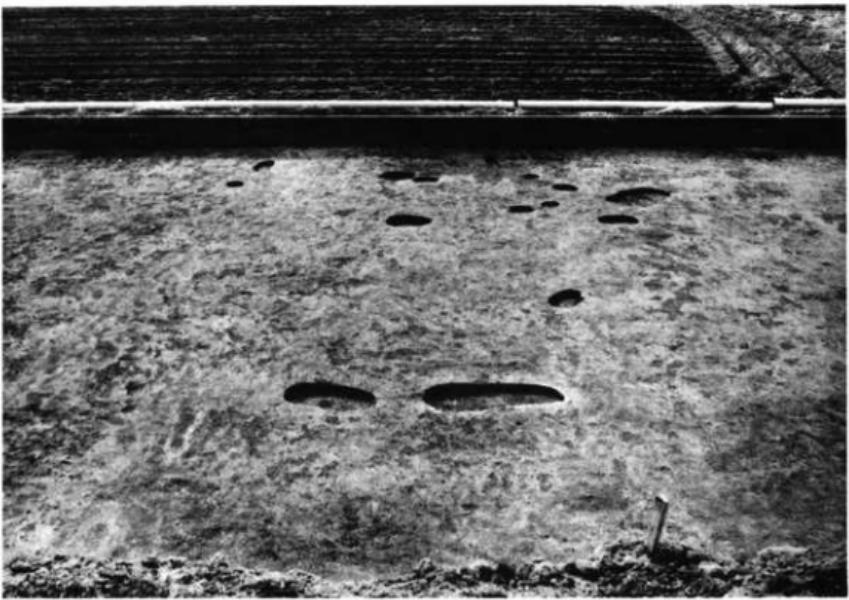
1 運動場 2 トレ道構検出状況



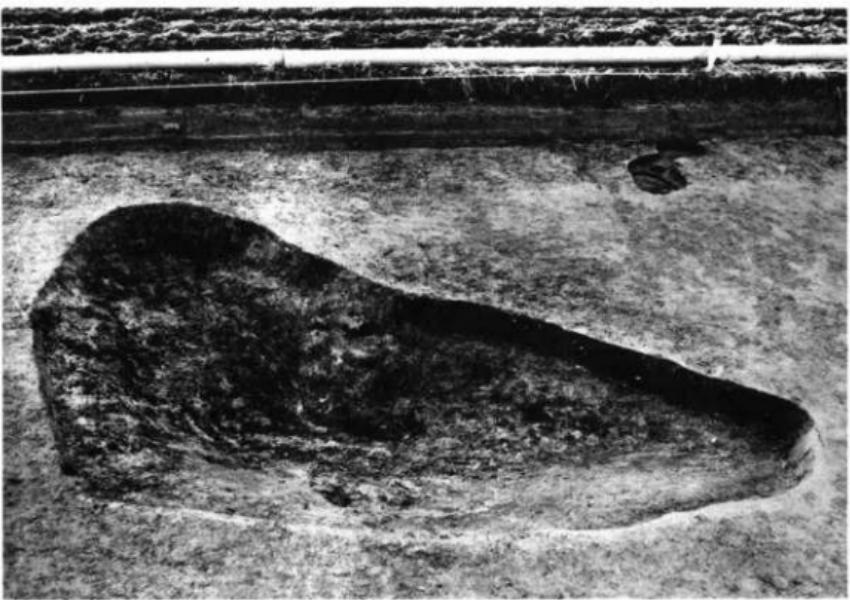
2 運動場 3 トレ道構検出状況



1 摧毀 西部全景



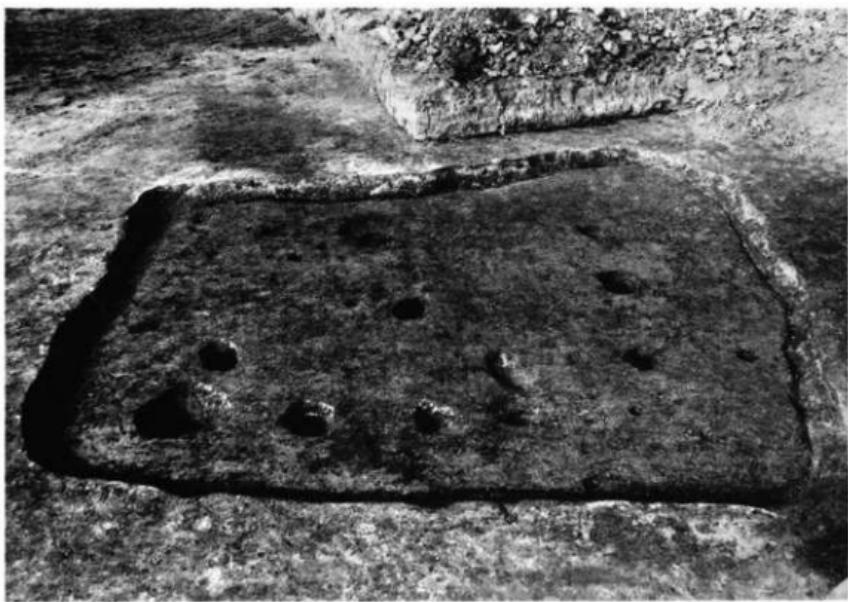
2 摧毀 南中部全景



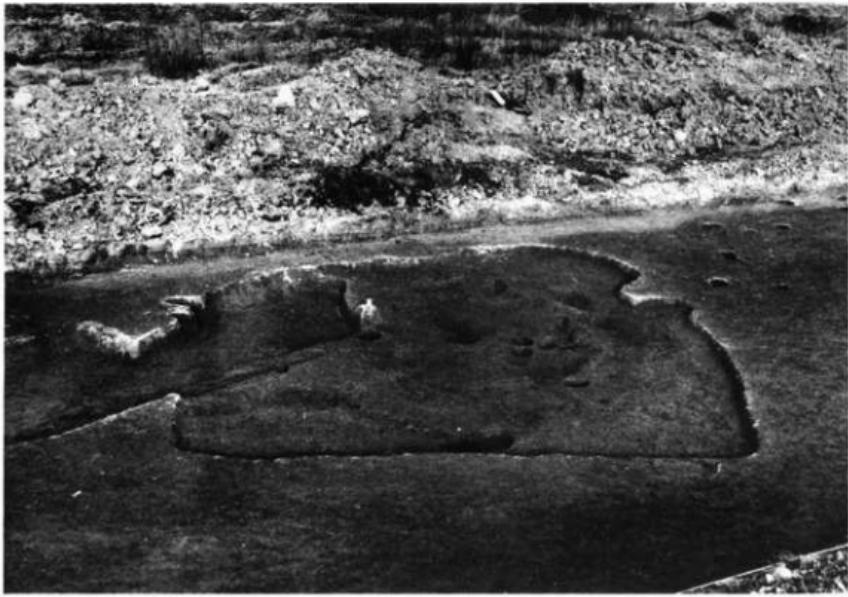
1 捣壁 SK—7 全景



2 捣壁 SK—11 全景



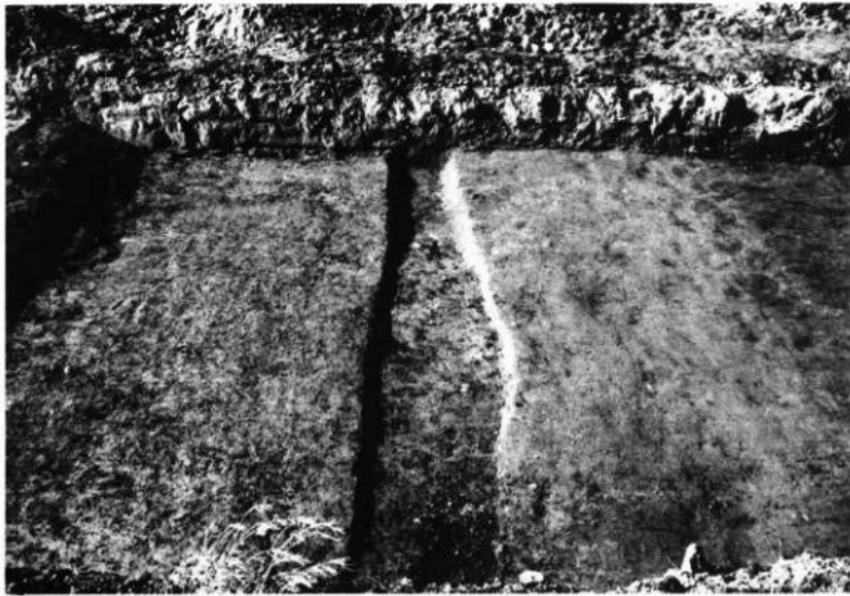
1 SH—1 全景



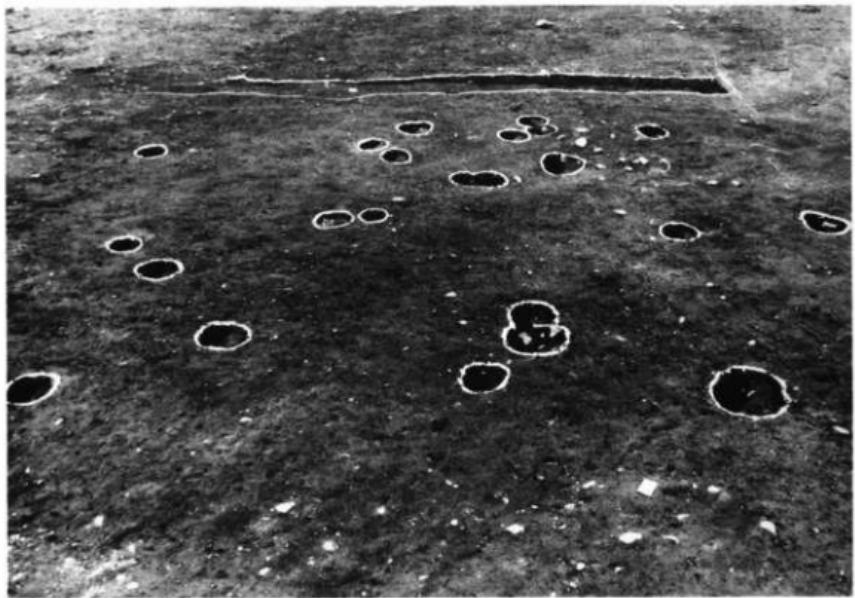
2 SH—2 全景



1 擋壁 SK—23全景



2 擋壁 SD—17全景



1 第1遺構面ピット群（東より）



2 SK 1 遺物出土状況



1 SX-1 遺物出土状況



2 第2遺構面全景（東より）



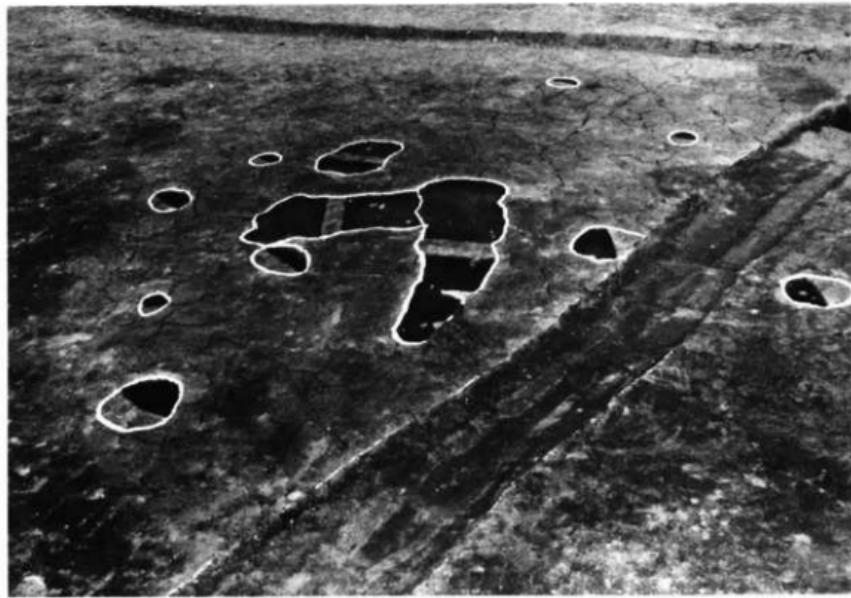
1 SB 1 および粘土面上遺構群（北より）



2 SB 1 (南より)



1 第2遺構面東半面全景（北上り）



2 SK2およびSK3周辺（南から）



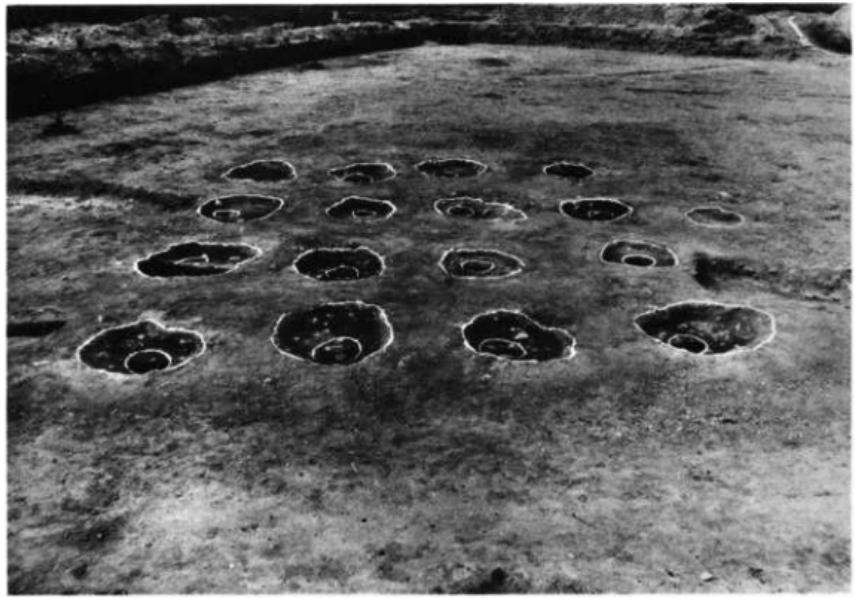
1 SD 3 および SD 4 (西より)



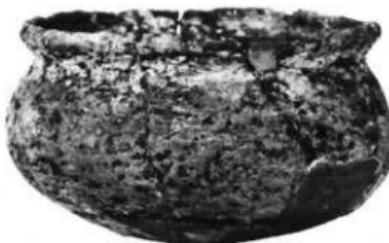
2 SD 4 遺物出土状況



1 第2遺構面全景（北より）



2 SB2（南より）

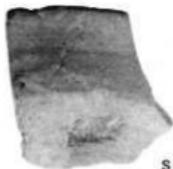


4

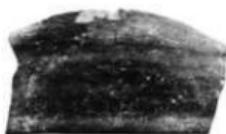
2



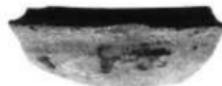
3



S-20



S-1



S-13



S-4

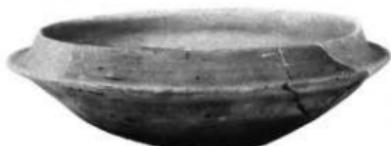


S-2



S-6

図版
三八 遺
物



S-8



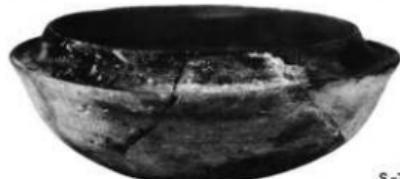
S-11



S-5



S-19



S-7



S-18



S-12



RT-1



S-13



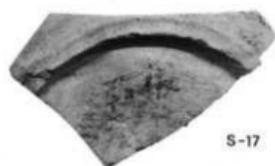
S-9



H-1



S-14



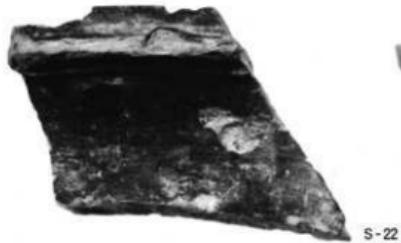
S-17



S-15



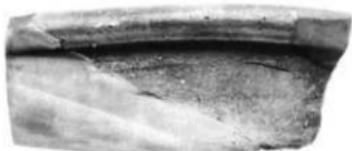
S-16



S-22



S-24



S-21



S-23

圖版四〇 遺物



1



7



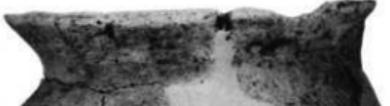
2



8



4



10



5



12



13



18



20



21



31



22



32



23



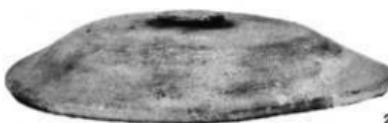
33



24



34



25



35



26



36



27



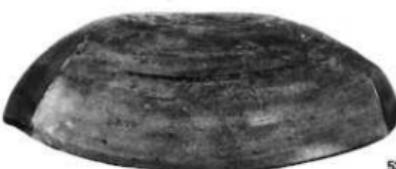
37



28



44



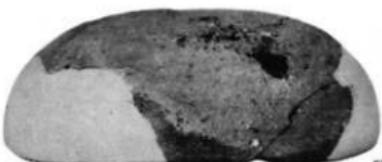
52



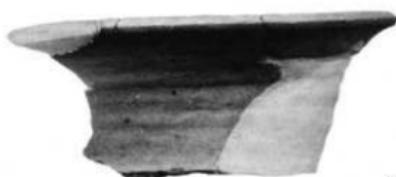
54



47



57



48



61



62



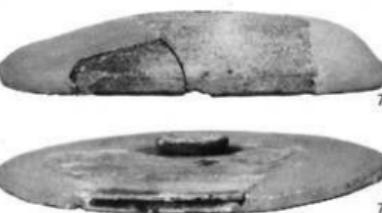
49



67



51



70



72



73



90



74



91



79



92



81



93



82



94



83



103



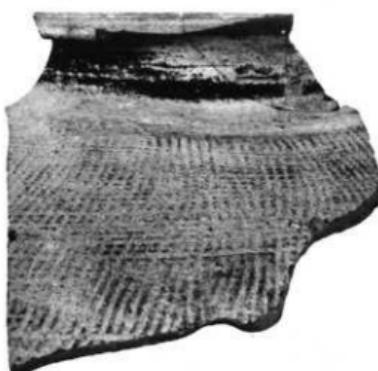
87



104



106



121



113



122



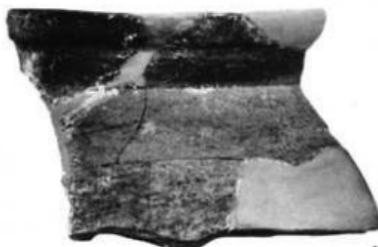
117



125



118



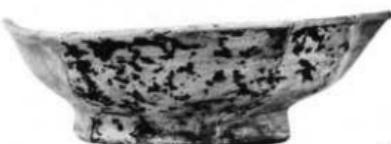
126



130



135



134



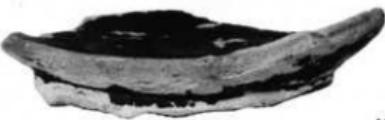
136



131



138



140



132



141



133



144

昭和58年3月

県立甲西高校建設に伴う
井戸遺跡発掘調査報告書

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷製本 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL. 351-6034番